

令和6年度（繰越）知床国立公園（非積雪期）
エゾシカ個体数調整実施業務 報告書



令和7（2025）年11月
公益財団法人 知床財団

報告書概要

1. 業務名

令和6年度（繰越）知床国立公園（非積雪期）エゾシカ個体数調整実施業務
(Population control of sika deer herd at Shiretoko National Park, 2024/2025)

2. 業務の背景・目的

知床国立公園及び知床世界自然遺産地域においては、エゾシカの増加による生態系への悪影響が深刻な状況となっており、環境省釧路自然環境事務所では、平成19年度よりエゾシカの個体数調整について検討・実施してきた。対策の進展によりエゾシカ生息密度は低下に転じ、知床岬先端部など一部地域では植生の回復がみられてきてはいるものの、目標とする生息密度には至っておらず、かつ低密度維持のためには一定程度の捕獲圧による個体数調整が必要な状況である。このため、関係機関において「第4期知床半島エゾシカ管理計画」を策定し、さらに具体的なアクションプランである実行計画により、実効的なエゾシカ対策に取り組んでいる。

本業務は、2024（R6）及び2025（R7）シカ年度^{*}知床半島エゾシカ管理計画実行計画（以下「実行計画」という。）に基づき、遺産地域内の特定管理地区（知床岬地区）においてエゾシカの個体数調整及び対策手法の検討を行うことを目的に実施するものである。

※ シカ年度は6月から翌年5月までの期間をいう。

3. 業務の実施体制

本業務は、環境省からの請負業務として公益財団法人知床財団が実施した。

4. 許認可等

本業務は、関係法令に基づき下表の許可等を得て実施された。許可申請等は一部を除き発注者が行い、請負者は主に申請書類等の作成補助を行った。

業務実施にあたり必要な許認可等

法令等		申請先	目的・内容	適用
鳥獣の保護及び管理ならびに狩猟の適正化に関する法律※1	捕獲許可申請	環境省釧路自然環境事務所長	エゾシカ捕獲	知床岬地区 岩尾別地区
森林法	入林届	網走南部森林管理署長 根釧東部森林管理署長	国有林への入林	知床岬地区 岩尾別地区
	国有林野使用承認申請	網走南部森林管理署長 根釧東部森林管理署長	エゾシカ捕獲に係る簡易囲いなどの設置	知床岬地区 岩尾別地区
航空法	飛行許可	国土交通大臣	無人航空機による目視外飛行	知床岬地区
その他	甲種漁港施設使用許可申請（北海道漁港管理条例）	北海道オホーツク総合振興局長（産業振興部水産課水産振興係）	ウトロ漁港（知床岬地区）のチャーター船による使用	知床岬地区

5. 業務の実施方法及び結果

I. 遺産地域内におけるエゾシカ個体数調整の実施

知床岬地区において、4月24日から6月25日まで計5回（作業日数7日、作業人工数延べ24人日）、船舶により移動し、捕獲を行った。捕獲手法については、待伏せ式狙撃にて合計7頭を捕獲した。

II. 遺産地域内におけるエゾシカ個体数調整のための手法検討

事業計画に基づき、以下の手法について検討を行った。検討にあたっては、簡易囲いかなによる捕獲試行や有識者ヒアリングなどを環境省担当官と適宜連絡調整の上実施した。

1. 自動撮影カメラによる現地モニタリング調査の実施

知床岬地区におけるエゾシカの生息密度および動態を把握するため、同地区に設置されている自動撮影カメラ計27台の維持管理及びデータ回収を行った。同調査を実施するにあたり、環境省担当官が指定する有識者から現地指導および助言を受けた。

2. 知床岬地区における捕獲手法の検討

エゾシカを効率的に捕獲するために、簡易囲いわなを用いた試行捕獲を行った。その他、捕獲後の個体搬出方法等について検討を行った。

3. より効果的かつ効率的な対策に向けた従来手法の改善見直しなど

非積雪期及び積雪期における効果的な捕獲対策の確立と従来捕獲手法の改善を目的として、シカのデコイを活用した捕獲対策（誘引）を試行した。

Ⅲ. 実行計画案の作成

2025(R7)シカ年度に遺産地域において実行可能な個体数調整のための各種取組について取りまとめた。

Ⅳ. 知床世界自然遺産地域科学委員会エゾシカ WG における資料の作成等

6月27日に開催された令和7年度第1回知床世界自然遺産地域科学委員会エゾシカ WG において必要に応じて資料作成や資料の説明、質疑への対応を行った。

Ⅴ. 業務打ち合わせ

業務打ち合わせを、4月10日、8月19日の計2回実施した。本年度の打ち合わせはウェブを使用した非対面形式で行った。

目次

I. 遺産地域内におけるエゾシカ個体数調整の実施.....	1
1-1. 知床岬地区におけるエゾシカ個体数調整の実施.....	1
(1) 実施方法	1
(2) 実施結果	6
(3) まとめ・考察.....	8
II. 遺産地域内におけるエゾシカ個体数調整のための手法検討.....	9
1. 自動撮影カメラによる現地モニタリング調査の実施.....	10
1-1. エゾシカ生息密度の推定.....	13
(1) 実施方法	13
(2) 実施結果	20
1-2. エゾシカの動態.....	21
(1) 実施方法	21
(2) 実施結果	26
1-3. まとめ・考察.....	27
2. 知床岬地区における捕獲手法の検討.....	28
2-1. 簡易囲いわなを用いた試行捕獲.....	28
(1) 実施方法	29
(2) 実施結果	33
(3) まとめ・考察.....	40
2-2. 捕獲個体の扱いについて（今後に向けた提案）.....	41
3. より効果的かつ効率的な対策に向けた従来手法の改善見直し.....	43
3-1. シカデコイを用いた捕獲対策の検討.....	43
(1) 実施方法	43
(2) 実施結果	46
(3) まとめ・考察.....	48
4. 有識者からの現地指導.....	50
III. 2026（R8）シカ年度遺産地域における実行計画案の作成.....	57
IV. 知床世界自然遺産地域科学委員会エゾシカWGにおける資料の作成等.....	59
V. 参考・引用文献.....	60
VI. 参考資料.....	63

I. 遺産地域内におけるエゾシカ個体数調整の実施

知床岬地区は、知床半島内の代表的シカ越冬地の一つであり、2007年度から環境省事業によるシカの個体数調整が実施されてきた。同地区では2007～2023シカ年度の17シーズンで合計977頭（うちメス成獣513頭）が捕獲されている。

本業務では、流氷期後の春期の非積雪期に待ち伏せ式狙撃にてシカの個体数調整捕獲を実施した。

1-1. 知床岬地区におけるエゾシカ個体数調整の実施

(1) 実施方法

業務実施日

本業務では、流氷期後の非積雪期である2025年4～6月に捕獲作業を5回実施した（表I-1）。その内の2回は1泊2日の現地宿泊を行った。

実施範囲

捕獲作業の実施範囲は、仕切柵に囲まれた海食台地草原部および森林部、ならびに仕切柵の南側エリアを対象として実施した（図I-1）。ただし、捕獲個体の回収が必須となることから基本的には文吉湾避難港（以下「文吉湾」という。）周辺を中心に捕獲を実施した。

実施体制

シカの捕獲作業の実施体制は、射手2～3名を基本として実施した。事業を安全かつ円滑に進めるため、緊急時の連絡体制表などを事前に作成し、関係者との連絡を密に行った。なお、作業員の現地宿泊場所として、知床岬地区にある2か所のハイタワーのうち文吉湾に近いハイタワーを使用した。滞在中の作業従事者のし尿処理については、文吉湾の漁業施設の既設トイレや携帯トイレを利用するなど、現地環境の汚染につながらないよう対策を行った。

表 I-1. 捕獲作業の実施状況

No.	日付	捕獲手法	射手数	補助員数	備考
	4月8日	-		(7)	現地下見・準備
1	4月24日	待伏せ式狙撃	2	5	
2	5月8日	待伏せ式狙撃	3	3	有識者飯島氏同行
	5月9日	待伏せ式狙撃	3	3	〃
3	5月22日	待伏せ式狙撃	3	3	
4	6月3日	待伏せ式狙撃	3	2	
5	6月24日	待伏せ式狙撃	2	4	
	6月25日	待伏せ式狙撃	2	4	有識者伊吾田氏同行
		計	18	24	

※ 滞在中は捕獲作業の他、自動撮影カメラ維持管理他、各種作業を並行して実施。

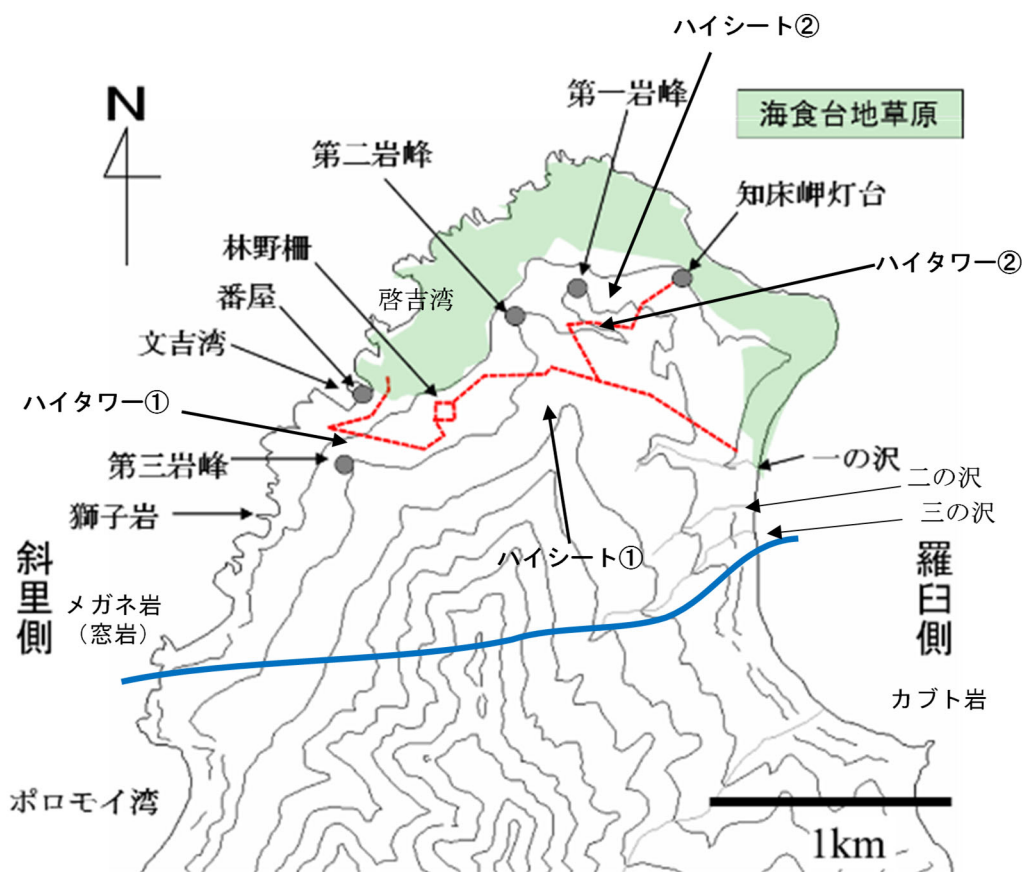


図 I-1. 知床岬地区の主要地点名と捕獲支援用仕切柵（赤点線）の位置。
青線以北が捕獲作業の実施範囲。

知床岬地区への移動

同地区へ通じる道路は無いため、現地への移動には船舶を使用した。斜里町のウトロ漁港を船舶の出発地及び帰港地とした。知床岬地区では文吉湾に着岸し、上陸した。

捕獲手法

捕獲作業は、ライフル銃の射手 2～3 名と捕獲個体の回収要員としての補助員 2～5 名の体制で実施した。捕獲手法は待伏せ式狙撃とし、捕獲個体を回収・運搬する観点から斜里側を中心に実施した（写真 I-1）。移動手段等については、過年度と同様に射手の移動に電動アシスト自転車を適宜使い、作業の効率化を図った。なお、銃弾は法令及び仕様書に基づき全て非鉛弾（銅弾）とした。また、捕獲の際は、従事者全員が業務無線機を所持するとともに、緊急時用として責任者が衛星携帯電話を携帯した。

当初、使用を予定していた簡易ハイシートについては網走南部森林管理署との協議結果をふまえ、環境省担当官と協議し、実施しないこととした。



写真 I-1. 待伏せ式狙撃の配置に付く射手の様子（2025 年 5 月 22 日）

ドローンによる捕獲支援

銃猟によるシカの捕獲をより効率的に行うため、捕獲作業の開始時に捕獲エリア周辺でドローンを飛行させ、シカの出現状況の把握に努めた（写真 I-2）。なお、ドローンを飛行させるにあたっては、飛行に係る許可を保持する作業従事者が操縦を担当し、目視外飛行により広範な範囲でシカの捜索を行った。また、操縦者がドローンでシカを探知した際には、捕獲従事者が確実に捕獲を遂行できるよう、操縦者から捕獲従事者へきめ細やかな情報伝達を行った。



写真 I-2. 知床岬台地上の林縁部をドローンで搜索する様子

捕獲個体に関する記録と回収作業

捕獲したシカについては、性別の判定と歯の萌出交換状況による簡易年齢判定（0歳と1歳以上の2段階に区分）を行い、生殖能力を持つ1歳以上のシカを成獣として、その結果を記録した。捕獲個体の回収は、人力での作業のほか、電動アシスト自転車（写真 I-3）を適宜利用した。捕獲個体の扱いについて、船舶に載せるまでに時間がかかる場合は、その間、ヒグマに持ち去られないよう電気柵で囲った仮置き場にて保管した（写真 I-4）。本業務では、捕獲した全ての個体を回収した。



写真 I-3. 捕獲した個体を搬出する様子（2025年5月8日）



写真 I-4. 捕獲個体を仮置きするための電気柵（2025 年 5 月 8 日）

ヒグマ遭遇に関する記録

本業務で捕獲作業中にヒグマと遭遇した場合には、遭遇した場所に加え、遭遇したヒグマの構成や行動等を記録した。

事前周知と利用者情報の記録

一般利用者や地域住民への事前周知のため、斜里町と羅臼町にある 4 つの自然系施設である知床世界自然遺産センター、知床自然センター、知床羅臼ビジターセンター（以下「知床羅臼 VC」という。）、知床世界遺産ルサフィールドハウス（以下「ルサ FH」という。）および羅臼町相泊地区において、捕獲作業に関する情報を掲示した（図 I-2）。また知床羅臼 VC 及びルサ FH では、海岸トレッキング利用者がカウンターを訪れた際に、個別に情報提供するとともに、行先や日程を聞き取り、捕獲作業における安全対策に活用した。また、斜里町ならびに羅臼町役場、羅臼漁協等の地元関係団体にも事前周知も含めて適宜情報共有を図った。捕獲作業中に現地で海岸トレッキング利用者や登山者等の利用者と遭遇した場合には、その場所や人数、利用形態等を記録することとした。

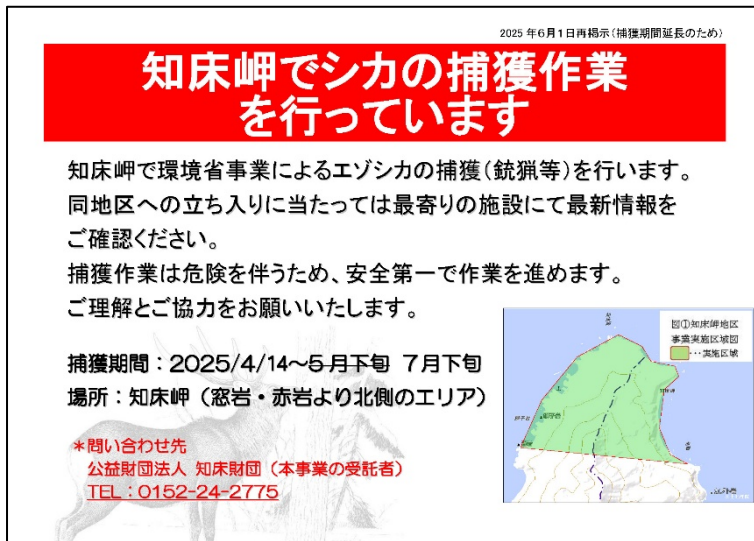


図 I-2. 掲示した注意喚起看板の内容

（2）実施結果

捕獲作業期間

捕獲作業期間は、4月24日から6月25日となった。捕獲作業期間前の4月8日には事前準備および現地下見を目的に渡航し、ハイタワー等の施設状況把握や物資運搬、融雪状況などの確認を行った。

捕獲結果

知床岬地区において射手延べ18人日によって計7頭（うちメス成獣1頭）のシカを捕獲した（直近の2023年度は射手延べ124人日で計36頭（うちメス成獣18頭））。捕獲日時や雌雄、捕獲機会や状況、捕獲場所については、表 I-2、表 I-3、図 I-3 に示した。

捕獲個体の回収

捕獲した7頭は全て回収し、船舶で搬送した後、一般廃棄物として適切に処理した。ヒグマに持ち去られるなどの事例は発生しなかった。

ヒグマとの遭遇状況

捕獲作業期間中のヒグマとの遭遇回数は2回であった。この2回とも特に危険な遭遇状況ではなかった。

利用者の状況

捕獲作業中に一般利用者とは会う事はなかった。なお、同業務期間中、知床岬地区にてテレビ局が長期滞在し取材を実施していたが、捕獲作業に影響が出ないよう事前に日程調整等を行った。

表 1-2. 2025 年 4 月から 6 月の知床岬地区におけるシカ捕獲結果

No.	日付	メス成獣	メス0歳	オス1尖	オス袋角	オス0歳	計
1	4月24日						0
2	5月8日		3	1			4
	5月9日						0
3	5月22日				1		1
4	6月3日	1				1	2
5	6月24日						0
	6月25日						0
	計	1	3	1	1	1	7

表 1-3. 2025 年 4 月～6 月の知床岬地区におけるシカの捕獲機会と捕獲状況

No.	日付	時間	場所	群れ頭数	群れ構成	捕獲数	距離	発砲	発砲なし理由	捕獲手法
1	4/24	7:20	文吉湾灯台側林内	4	メス主体	0	50	なし	走っていたため	待伏せ
2	4/24	11:40	文吉湾灯台側林内	5	メス主体	0	50	なし	走っていたため	待伏せ
3	5/8	7:40	文吉湾HT側林内	2	メス幼獣 オス1尖	2	50	あり		待伏せ
4	5/8	13:30	文吉湾灯台側草原	1	メス幼獣	1	200	あり		待伏せ
5	5/8	15:00	文吉湾HT側林内	1	メス幼獣	1	50	あり		待伏せ
6	5/8	15:30	文吉湾HT側草原	2	不明	0	300	なし	距離が遠い	待伏せ
7	5/8	17:00	文吉湾HT側草原	1	不明	0	200	なし	距離が遠い	待伏せ
8	5/9	4:30	文吉湾HT側林内	1	オス1尖	0	100	あり		待伏せ
9	5/9	4:30	文吉湾HT側草原	2	メス成獣	0	50	なし	走っていたため	待伏せ
10	5/22	7:15	文吉湾灯台側林内	1	オス成獣 (落角)	1	50	あり		待伏せ
11	6/3	11:45	文吉湾HT側草原	1	メス成獣	0	200	あり		待伏せ
12	6/3	13:05	文吉湾HT側林内	2	メス成獣 オス幼獣	2	50	あり		待伏せ

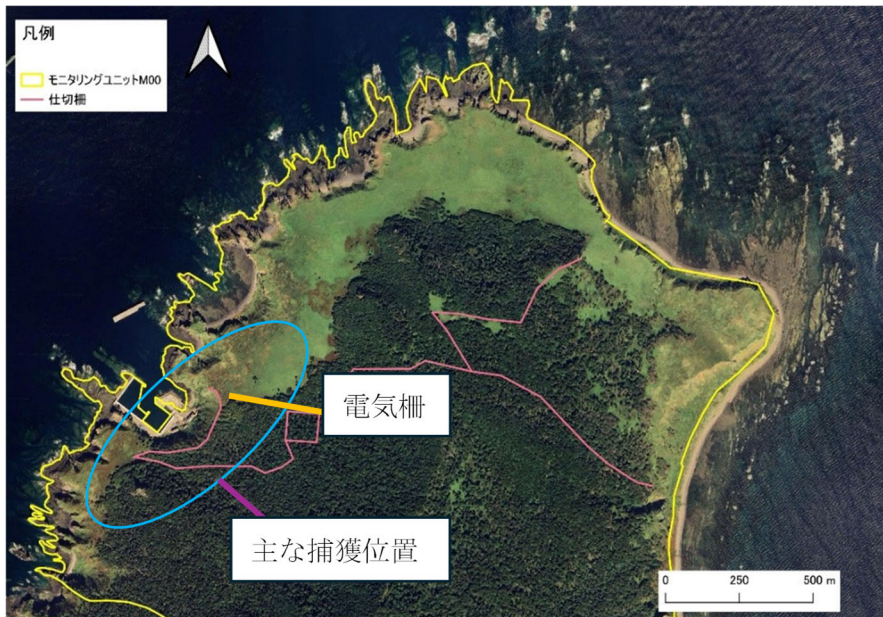


図 I-3. 2025 年 4 月から 6 月の知床岬地区におけるエゾシカ捕獲地点

(3) まとめ・考察

本業務でメス成獣 1 頭を含む 7 頭のシカを捕獲した結果、同地区の 2007 シカ年度以降の 18 シーズンの累計捕獲数は 984 頭（うちメス成獣 514 頭）となった。

今年度の捕獲作業においては、当初の事業計画の段階で実施回数が「4 日以上」と過年度より少なく設定されていたため、よりシカが滞留し捕獲適期と考えられる 4 月中に集中して捕獲作業を行う予定とした。しかし、予定していた 4 月の 4 回（4 月 14 日, 16～17 日, 18 日, 21 日）がいずれも荒天や時化の影響で渡航不可となり、捕獲作業の開始は 4 月 24 日からとなった。以後 2～3 週間ごとに渡航し 6 月後半までの間に計 4 回（7 日間）の捕獲作業を行い、捕獲場所を斜里側に集中することで捕獲個体の回収コストの低減を図りつつ、最終的に計 7 頭のシカを捕獲、全ての死体を回収し完了という結果となった。

本業務の根拠計画である「第 4 期知床半島エゾシカ管理計画」においては、本地区の管理目標としてエゾシカの採食圧の軽減による生物多様性（特に植生）の保全・再生、数値目標として航空カウント調査によるエゾシカ発見密度 10 頭/km²以下が掲げられている。この内、航空カウント調査については、昨年度調査結果では 145.51 頭/km²（令和 6 年 3 月 4 日調査）が確認されており、依然として高密度状態である。よって、現在議論がされている知床岬地区での積雪期捕獲の再開に加え、特に春期を中心とした非積雪期の捕獲作業も含めて検討を行い、今後の目標達成に向け継続した取組が必要である。

II. 遺産地域内におけるエゾシカ個体数調整のための手法検討

特定管理地区を対象に、シカの生息密度および動態の把握に資するデータを収集および低コストでシカの低密度状態を維持するための効果的かつ効率的な手法について、現地で各種検討を計 14 日実施した。実施作業スケジュールについては表 II-1 に示した。

表 II-1. 本業務の作業スケジュール一覧

実施回	実施期間	日数	作業内容
1	2025 年 4 月 8 日	1 日	自動撮影カメラデータ回収・メンテナンス 簡易囲いわな検討
2	2025 年 4 月 24 日	1 日	自動撮影カメラデータ回収・メンテナンス 簡易囲いわな検討
3	2025 年 5 月 8～9 日	2 日	自動撮影カメラメンテナンス・調整 有識者指導（飯島氏）
4	2025 年 5 月 22 日	1 日	自動撮影カメラメンテナンス・調整
5	2025 年 6 月 3 日	1 日	簡易囲いわな準備
6	2025 年 6 月 24～25 日	2 日	簡易囲いわな捕獲試行 有識者指導（伊吾田氏）
7	2025 年 7 月 8～9 日	1 日	簡易囲いわな捕獲試行
8	2025 年 7 月 17～18 日	2 日	自動撮影カメラ回収（遠隔地 3 台） 簡易囲いわな捕獲試行 有識者指導（稲富氏）
9	2025 年 8 月 5～6 日	2 日	自動撮影カメラデータ回収・メンテナンス 簡易囲いわな捕獲試行・撤収
10	2025 年 10 月 2 日	1 日	自動撮影カメラデータ回収・メンテナンス

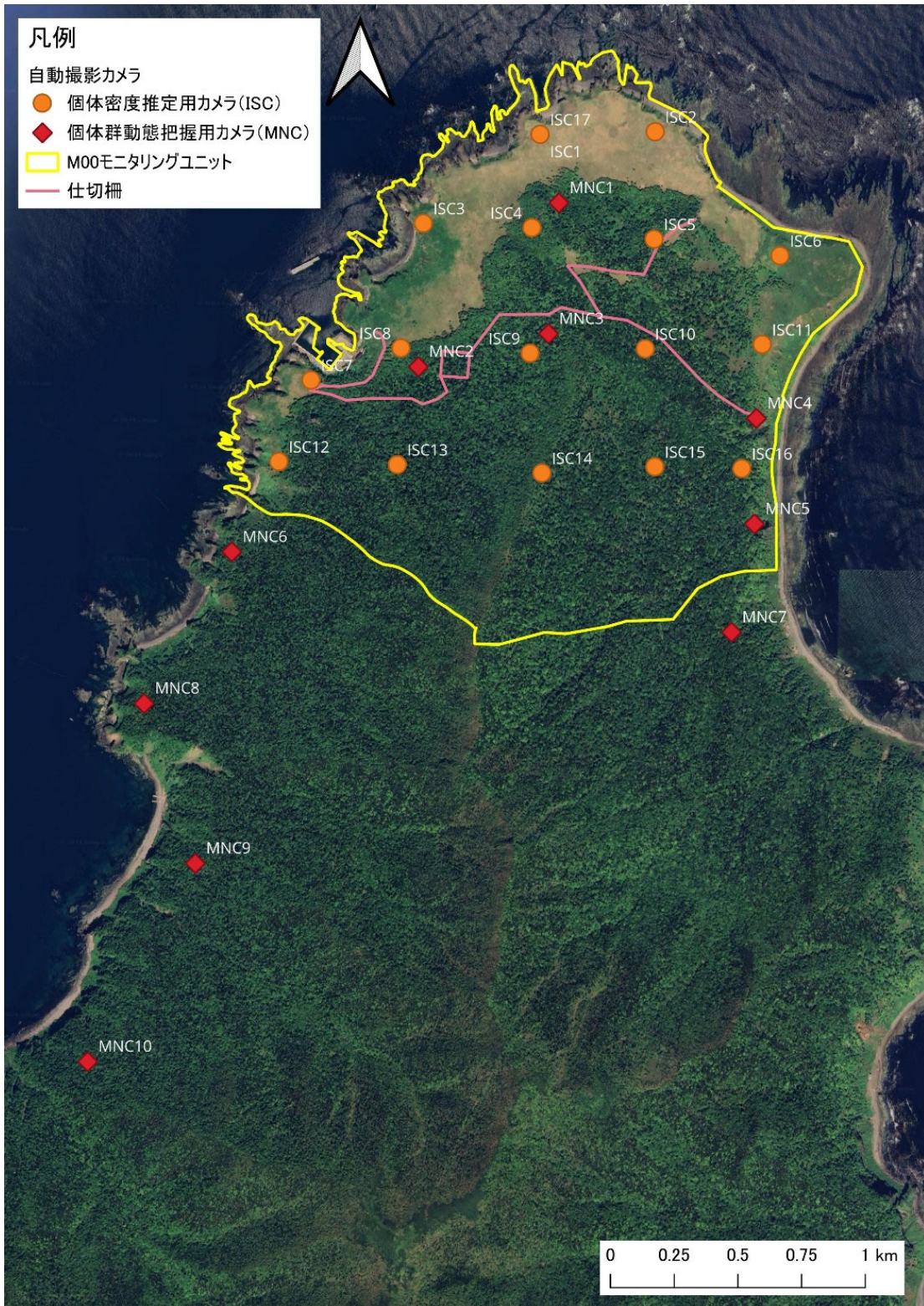
1. 自動撮影カメラによる現地モニタリング調査の実施

知床岬地区におけるシカの生息密度および動態の把握に資するデータを収集するため、「自動撮影カメラによる現地モニタリング調査」を実施した。本調査に当たっては、2024年度に設置された生息密度推定用カメラ 17 台（以下「ISC」という。）、動態把握用カメラ 10 台（以下「MNC」という。）の合計 27 台について、データ交換ならびに電池交換等のメンテナンスを行った。設置位置は図Ⅱ-1 の通りである。また、各種調整に当たっては、エゾシカ WG 委員である飯島勇人氏（所属：国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 野生動物研究領域）から現地指導および助言を受けた。設置されている自動撮影カメラの機種は、ハイクカム LT4G（株式会社ハイク、北海道旭川市）である（写真Ⅱ-1）。これらの自動撮影カメラ（以下「カメラ」という。）は 2025 年 10 月末時点においても設置を継続している。本調査における作業スケジュールおよび作業内容については表Ⅱ-2 に示した。回収したデータについては、シカの撮影枚数や撮影延べ頭数を記録してデータ整理を行った。データ整理にあたり、AI で画像処理を行う「EcoAssist¹」を活用した。EcoAssist をインストールするには、「Miniforge²」、「Git³」も追加インストールする必要がある。この AI を活用することで、動物が存在すると判明された画像リストが出力され、そのリストをもとに作業員が画像を肉眼で確認しながらシカを識別した。

¹ EcoAssist : <https://addaxdatascience.com/ecoassist/>

² Miniforge : <https://github.com/conda-forge/miniforge?tab=readme-ov-file>

³ Git : <https://gitforwindows.org/>



図Ⅱ-1. 知床岬地区におけるカメラの設置位置全体図

※ISC17は4月8日に回収.

※MNC8, MNC9, MNC10は7月17日に回収.



写真Ⅱ-1. 調査に使用したカメラ（ハイクカム LT4G）

表Ⅱ-2. カメラの作業スケジュールおよび作業内容

No.	作業日	作業内容
1	4月8日	<ul style="list-style-type: none"> ・生息密度推定用カメラ 計14台のデータ回収・電池交換等のメンテナンス (ISC 1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,15,16) *ISC17回収 ・個体群動態把握用カメラ 計6台のデータ回収・電池交換等のメンテナンス (MNC1,2,3,4,5,7)
2	4月24日	<ul style="list-style-type: none"> ・生息密度推定用カメラ 計1台の支柱杭の交換 (ISC3) ・個体群動態把握用カメラ 計2台のデータ回収・電池交換等のメンテナンス (MNC13,14)
3	5月8～9日	<ul style="list-style-type: none"> ・生息密度推定用カメラ 有識者指導（飯島氏）の元、計5台の撮影面積の再設定・高さ調整等。(ISC3,4,7,8,12)
4	5月22日	<ul style="list-style-type: none"> ・生息密度推定用カメラ 計11台の撮影面積の再設定・高さ調整等。 (ISC1.2.5.6,9,10,11,13,14,15,16)

No.	作業日	作業内容
5	7月17～18日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個体群動態把握用カメラ 計 3 台の回収（遠隔地のため） (MNC8,9,10)
6	8月5～6日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生息密度推定用カメラ 計 16 台のデータ回収 (ISC1～16) <ul style="list-style-type: none"> ・ 個体群動態把握用カメラ 計 7 台のデータ回収・電池交換等のメンテナンス (MNC1～7)
7	10月2日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生息密度推定用カメラ 計 16 台のデータ回収 (ISC1～16) <ul style="list-style-type: none"> ・ 個体群動態把握用カメラ 計 7 台のデータ回収・電池交換等のメンテナンス (MNC1～7)

1-1. エゾシカ生息密度の推定

(1) 実施方法

カメラを用いたシカの生息密度の推定には、REM (Random Encounter Model)、CT-DS (Distance Sampling with camera traps)、REST (Random Encounter and Staying Time)、IS (Instantaneous sampling) 等の様々な手法が存在する。本業務では、飯島勇人氏から助言を受けて、IS 推定量 (Moeller et al. 2018) の手法を採用した。

この手法では、①タイムラプス機能を使用する（赤外線センサーは不使用）、②有効撮影範囲を設定する、③動物への行動に影響を与える行為をしない（誘引物を用いない）、④無作為にカメラを設置する（メッシュの重心点等）必要がある。また、赤外線センサーを使用しないため、カメラの性能に左右されず、草本類の伸長や日光等に起因する誤撮影の発生が無い点の特徴である。必要な調査期間は長くても約 1 か月であり、任意に設定した有効撮影範囲内で確認されたシカの頭数と有効撮影範囲の面積を解析処理して、生息密度の推定を行うことが可能である（図Ⅱ-2）。

調査初年の 2024 年度、カメラの設置位置については M00 モニタリングユニット内を行政管理庁告示第 143 号に基づく標準地域メッシュ（分割地域メッシュ）により 500 メートルメッシュで区切り、各メッシュの重心点に計 17 台を設置した（図Ⅱ-3）。ただし、断崖等によりカメラをメッシュの重心点に配置することが困難な場所については、重心点に最

も近く、かつ設置可能な位置に配置した。なお、ISC1 と ISC17 は同一地点に設置し、ISC17 はタイムラプスを 15 分間隔（他の 16 台のカメラは全て 5 分間隔）およびセンサー感度を ON に設定して、電池の消耗や撮影枚数の違いを比較するために試験的に設置した。その結果、2024 年度業務にて飯島氏が比較を行い、撮影間隔の違いは最終的な生息密度の推定に大きな差異はないと結論となった。よって、本業務において、電池消耗を防ぐとともに回収データ量の軽減を目的とし、16 台全てのカメラについてタイムラプスを 15 分間隔に再設定した。

カメラの設定方法は表 II-3、設置位置情報は表 II-4、各地点における撮影状況は表 II-5-a から表 II-5-c に示した。

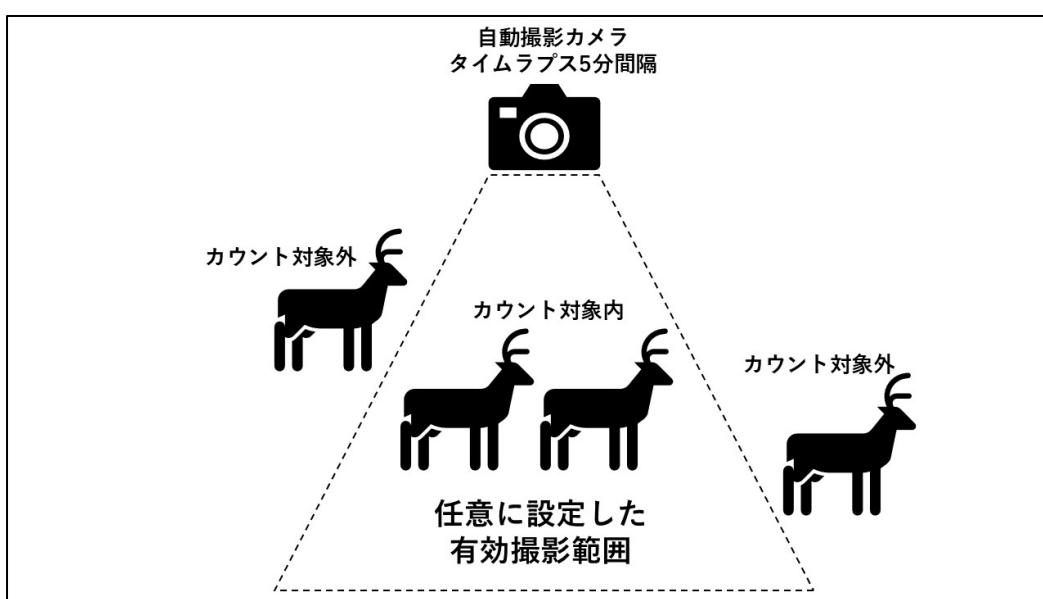
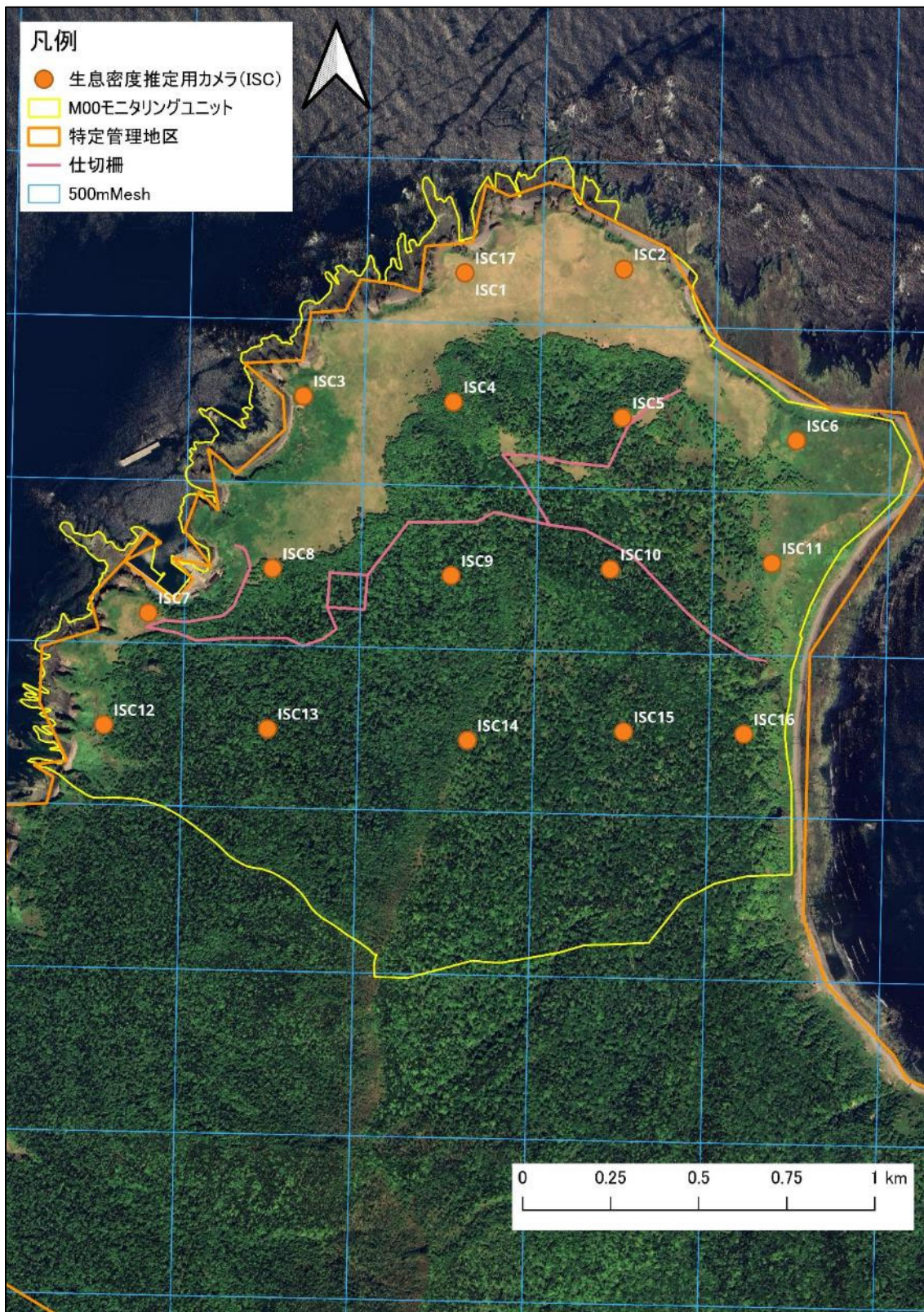


図 II-2. IS の調査イメージ



図Ⅱ-3. 知床岬地区における生息密度推定用カメラ（ISC）の設置位置
 ※ISC17は4月8日に回収.

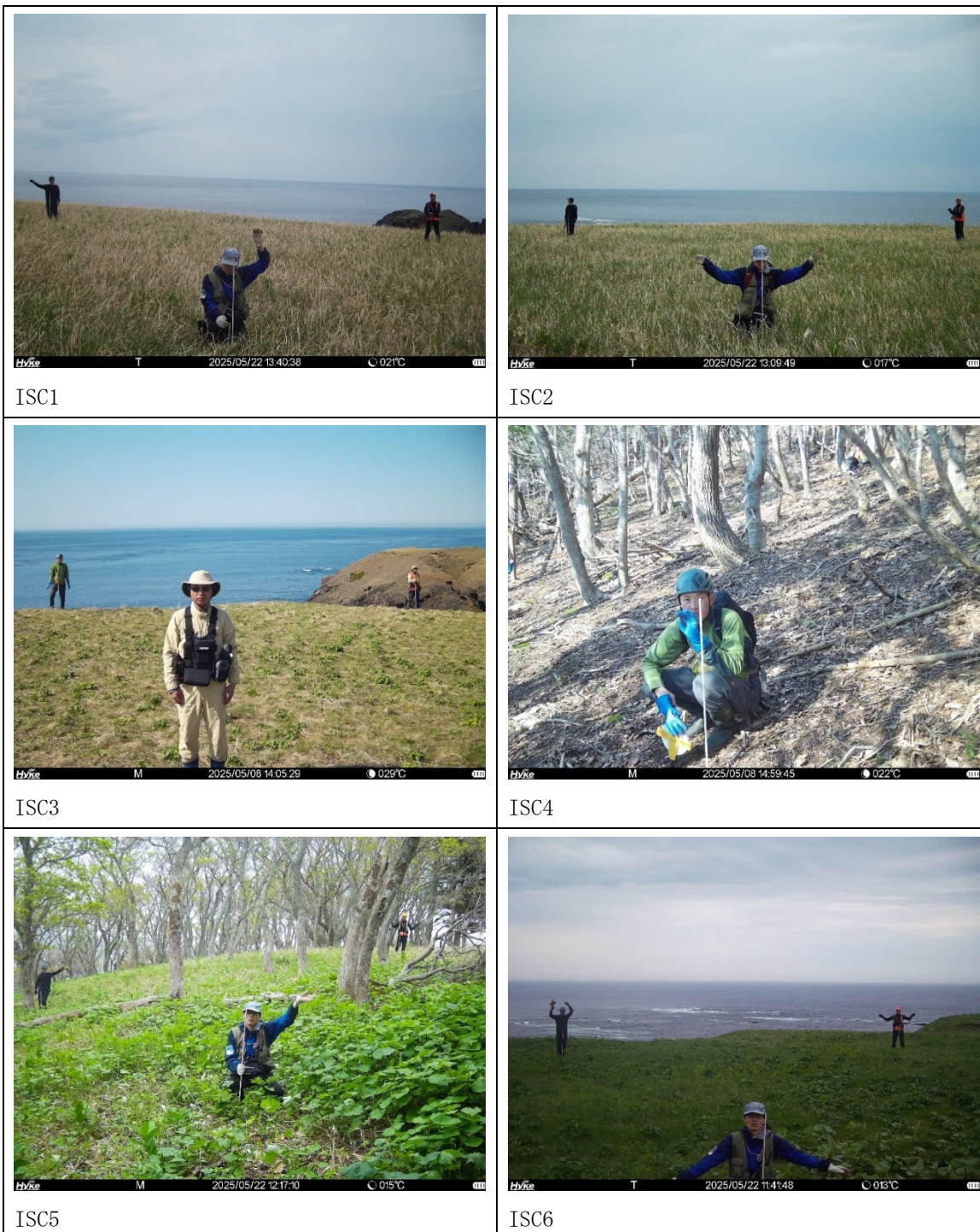
表Ⅱ-3. 生息密度推定用のカメラ設定方法（2025年10月2日時点）

モード	静止画
解像度	500万画素
撮影枚数	1枚
撮影時間（動画）	—
センサー感度	OFF
インターバル（ディレイ）	—
フラッシュ	高
音声	OFF
タイムラプス間隔	ON 15分(16台)
上書き設定	OFF

表Ⅱ-4. 生息密度推定用カメラの設置位置情報（2025年10月2日時点）

カメラ ID	町別	緯度	経度
ISC1	斜里町	44.34294	145.32848
ISC2	斜里町	44.34312	145.33414
ISC3	斜里町	44.33972	145.32282
ISC4	斜里町	44.33964	145.32817
ISC5	斜里町	44.33932	145.33419
ISC6	羅臼町	44.33883	145.34040
ISC7	斜里町	44.33390	145.31713
ISC8	斜里町	44.3353	145.32185
ISC9	斜里町	44.33521	145.32821
ISC10	羅臼町	44.33545	145.33387
ISC11	羅臼町	44.33569	145.33962
ISC12	斜里町	44.3312	145.31596
ISC13	斜里町	44.33118	145.32179
ISC14	羅臼町	44.33099	145.32891
ISC15	羅臼町	44.33129	145.33446
ISC16	羅臼町	44.33129	145.33874

表Ⅱ-5-a. 地点ごとにおける生息密度推定用カメラの撮影地の様子 (ISC1~ISC6)



表Ⅱ-5-b. 地点ごとにおける生息密度推定用カメラの撮影地の様子 (ISC7~ISC12)



表Ⅱ-5-c. 地点ごとにおける生息密度推定用カメラの撮影状況（ISC13～ISC16）



(2) 実施結果

2024年度最終回収日である2024年9月4日から2025年8月5日までの期間において、計623,626枚の撮影があり、そのうちシカが撮影されたのは7,162枚であった。撮影結果を表Ⅱ-6に示した。なお、冬期における電池切れによる未撮影期間等については本集計からは除外した。

シカの撮影延べ頭数が最も多かった地点はISC6であり、ISC11が続いた。次いでISC12、ISC15も1,000頭を超える延べ頭数が確認された。撮影の多かった地点については、草原や林内など特に偏りは見られないことから時期によって生息する環境を変えていることが考えられる。

表Ⅱ-6. 生息密度推定用の2024年度最終回収日から8月5日の回収データ集計結果

カメラ ID	撮影期間	稼働日数	全撮影枚数	エゾシカ 撮影枚数	エゾシカ 撮影延べ頭数
ISC1	24.9.4-25.8.5	271	45,021	77	108
ISC2	24.9.4-25.8.5	274	45,608	139	225
ISC3	24.9.4-25.8.5	130	17,592	167	256
ISC4	24.9.4-25.8.5	294	43,698	119	140
ISC5	24.9.4-25.8.5	247	42,525	357	638
ISC6	24.9.4-25.8.5	297	44,389	1,359	2,805
ISC7	24.9.4-25.8.5	167	33,946	209	655
ISC8	24.9.4-25.8.5	243	26,018	529	907
ISC9	24.9.4-25.8.5	296	42,934	227	272
ISC10	24.9.4-25.8.5	263	42,581	17	23
ISC11	24.9.4-25.8.5	297	45,096	801	1,815
ISC12	24.9.4-25.8.5	307	43,188	951	1,650
ISC13	24.9.4-25.8.5	256	41,356	125	150
ISC14	24.9.4-25.8.5	155	21,129	434	647
ISC15	24.9.4-25.8.5	257	43,692	1,161	1,242
ISC16	24.9.4-25.8.5	260	44,853	490	783

※ すべての地点において、電池切れ等により一部データの欠損が発生した。

1-2. エゾシカの動態

(1) 実施方法

本業務では、知床岬地区に生息するシカの個体群動態を通年で把握することを目的に、カメラ調査を実施した。この調査では、カメラの赤外線センサーを使用して、シカの撮影頻度の変化を把握することを目的とした。調査初年の2024年度、カメラの設置位置については、同地区を5kmメッシュで区切り、各メッシュに1~7台のカメラを計10台設置した(図II-3)。本調査におけるカメラの設定方法については表II-7、設置位置情報については表II-8、各地点における撮影地の状況については表II-9aから表II-9bに示した。

なお、知床岬地区の斜里町側南に設置したMNC8, MNC9, MNC10の3台については、遠隔地でありデータ回収やメンテナンス等に一定のコストが掛かるため、調査初年度から1年以上のデータは蓄積できたことから、7月17日をもって終了としカメラを回収した。



図Ⅱ-3. 知床岬地区における動態把握用カメラ（MNC）の設置位置
 ※MNC8, MNC9, MNC10 は 7 月 17 日に回収.

表Ⅱ-7. 個体群動態把握用のカメラ設定方法（2025年10月2日時点）

モード	静止画
解像度	500万画素
撮影枚数	2枚
撮影時間（動画）	—
センサー感度	中
インターバル（ディレイ）	5分
フラッシュ	高
音声	OFF
タイムラプス間隔	ON(8時間) ※カメラ稼働時間の確認用
上書き設定	OFF

表Ⅱ-8. 個体群動態把握用のカメラの設置位置情報（2025年10月2日時点）

カメラID	町別	緯度	経度
MNC1	斜里町	44.34054	145.32948
MNC2	斜里町	44.33465	145.32273
MNC3	斜里町	44.33591	145.32911
MNC4	羅臼町	44.33307	145.33941
MNC5	羅臼町	44.32934	145.33942
MNC6	斜里町	44.32798	145.31374
MNC7	羅臼町	44.32551	145.33841
※MNC8	斜里町	44.32253	145.30958
※MNC9	斜里町	44.31692	145.31226
※MNC10	斜里町	44.30984	145.30717

※MNC8, MNC9, MNC10は7月17日に回収.

表Ⅱ-9-a. 地点ごとにおける動態把握用カメラの撮影地の様子 (MNC1~MNC6)



表Ⅱ-9-b. 地点ごとにおける動態把握用カメラの撮影地の様子（MNC7～MNC10）

 <p>A photograph showing a deer standing in a forest clearing with a dirt path. The ground is covered in green vegetation. The image has a timestamp of 2024/09/04 17:27:30 and a temperature of 19°C.</p>	 <p>A photograph showing two people standing in a forest clearing. The ground is covered in green vegetation. The image has a timestamp of 2025/07/17 10:46:09 and a temperature of 28°C.</p>
<p>MNC7</p>	<p>MNC8 *7月17日回収</p>
 <p>A photograph showing a dense forest interior with many trees and green vegetation. The image has a timestamp of 2025/07/16 11:04:41 and a temperature of 27°C.</p>	 <p>A photograph showing a person standing in a forest clearing, holding a camera. The ground is covered in green vegetation. The image has a timestamp of 2025/07/17 09:19:17 and a temperature of 28°C.</p>
<p>MNC9 *7月17日回収</p>	<p>MNC10 *7月17日回収</p>

(2) 実施結果

2024年度最終回収日である2024年9月4日から2025年8月5日までの期間（一部地点は2025年7月17日まで）において、計48,755枚の撮影があり、そのうちシカが撮影されたのは14,467枚であった（表Ⅱ-10）。

各地点におけるシカの撮影枚数を見ると、MNC2が最も高く、次いでMNC4であった。MNC2は斜里町側の林内に位置し、MNC4は羅臼町側の仕切柵末端部にあたり、どちらも太いシカ道があることから、シカが頻繁に利用していることが確認された。その他、季節的な変化や地点ごとの動向等は今回取りまとめ整理した情報を基に今後検証を行う予定である。

表Ⅱ-10. 個体群動態把握用の2024年度最終回収日から8月5日の回収データ集計結果

カメラ ID	設置期間	稼働日数	全撮影枚数	エゾシカ 撮影枚数	エゾシカ 撮影延べ頭数
MNC1	24.9.4-25.8.5	313	2,735	561	957
MNC2	24.9.4-25.8.5	327 ^{※1}	6,152	3,546	5,250
MNC3	24.9.4-25.8.5	333	3,613	969	1,327
MNC4	24.9.4-25.8.5	298 ^{※1}	7,661	3,018	4,502
MNC5	24.9.4-25.8.5	222	2,864	430	598
MNC6	24.9.4-25.8.5	335	10,448	207	271
MNC7	24.9.4-25.8.5	152 ^{※1}	2,496	711	770
MNC8 ^{※2}	24.9.4-25.7.17	298	5,156	2,636	3,452
MNC9 ^{※2}	24.9.4-25.7.17	315	2,650	444	663
MNC10 ^{※2}	24.9.4-25.7.17	317	4,980	1,945	2,620

※1. カメラ設置の不具合により一部データの欠損が発生した。

※2. MNC8, MNC9, MNC10は7月17日に回収。

1-3. まとめ・考察

本業務では、昨年度に引き続きカメラを用いたモニタリング調査の試験運用を行った。それぞれのカメラは、2024年5月以降に順次設置され、おおよそ1年以上のデータを収集することができた。運用開始後には、草本繁茂による視認性の低下や電池消耗によるデータ欠損など様々な課題が生じたが、都度改善を図りつつ現在もモニタリングを継続している。

2年目となる現在、一部にデータ不足はあるものの、これまで未解明だった年間を通じたの知床岬地区のシカ生息密度推定や個体群動態把握に必要な情報が得られつつある。さらにデータを蓄積することで、シカの状況を長いスパンで俯瞰することが可能になると考えられ、効率的かつ効果的な個体数調整に向けた実行計画の策定に寄与することが期待される。特に現在実施されている航空カウント調査は冬期の限られた日数の調査結果であり、見落とし率が高い可能性があることから、厳冬期においても本モニタリングのデータを活用することができれば、航空カウント調査結果の補完が可能になると考えられる。さらに、春から夏にかけてのシカの生息情報が植生の採食圧や生育状況のみから判断せざるを得なかったことから、これらを補完する意味でも本モニタリングの意義は大きいと考える。

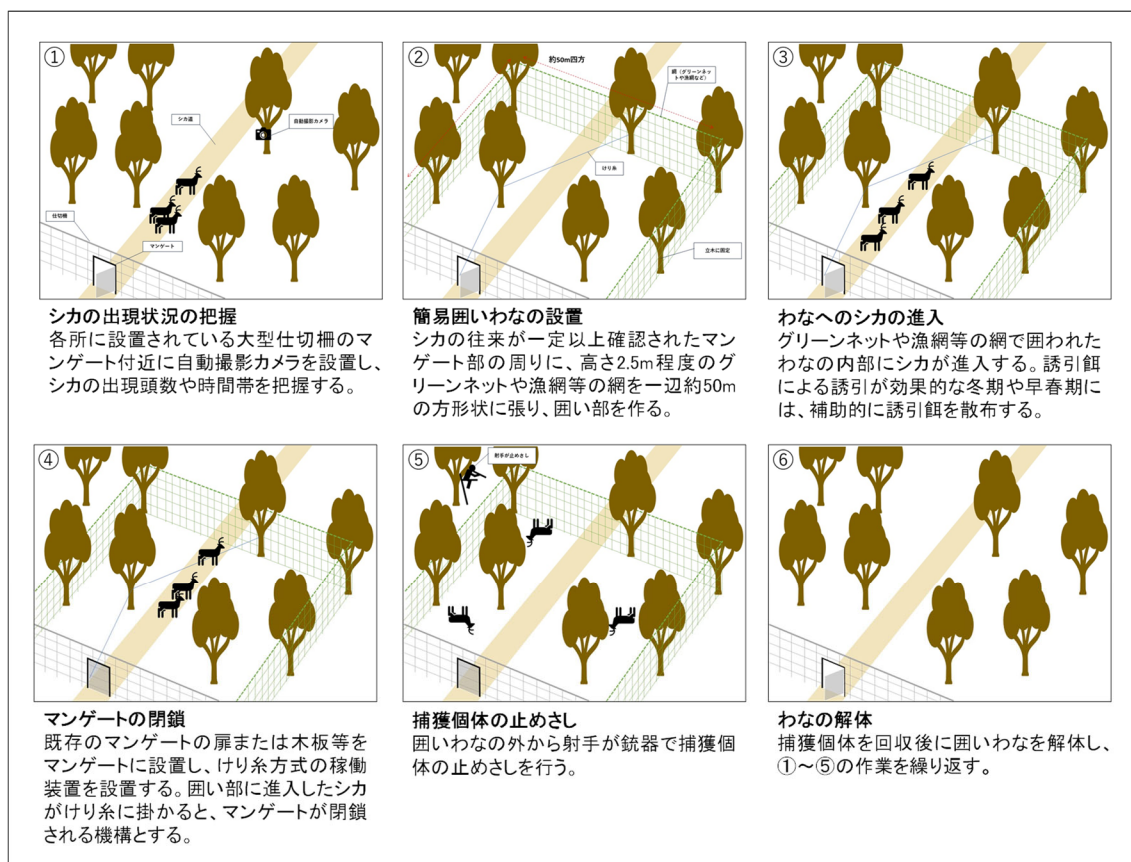
2. 知床岬地区における捕獲手法の検討

シカを効率的に捕獲するために、知床岬地区にて簡易囲いわなを用いた試行捕獲を行った。その他、捕獲後の個体搬出方法等についての検討を行った。

2-1. 簡易囲いわなを用いた試行捕獲

知床世界自然遺産地域で過年度に実施されてきたシカの捕獲手法の一つに、複数頭のシカを捕獲し生体搬出することを目的とした囲いわな捕獲がある。この捕獲手法においては、2011年シカ年度から2017年度にかけて幌別-岩尾別地区において運用され、一定の捕獲実績があったものの、同一の囲いわなで複数年にわたり捕獲を継続したことに起因してシカがわなを忌避・学習（トラップシャイ）し、運用年数を重ねるごとに捕獲数が減少した経過がある。

本業務においては、「令和6年度知床国立公園エゾシカ対策検討業務」での検討内容および「令和6年度知床国立公園（積雪期）エゾシカ個体数調整実施業務」における幌別-岩尾別地区での簡易囲いわな捕獲試行の成果を踏まえ、簡易囲いわなを用いた捕獲を知床岬地区にて試行的に実施した（図II-4）。



図II-4. 簡易囲いわなの構造及び運用方法

(1) 実施方法

囲いわなの基本概要

今回試行した簡易囲いわなは、知床岬地区の斜里町側に位置する既存の仕切柵とマンゲートを活用する形で設置した(図Ⅱ-5,写真Ⅱ-2)。追加設置した囲い部は、人力による運搬と設置が可能な簡易的な資材を用い立木等を利用することで、少人数かつ短時間での設置が可能な構造とした。



図Ⅱ-5. 簡易囲いわなの設置位置



写真Ⅱ-2. 簡易囲いわな設置位置の既存の仕切柵とマンゲート (2025年6月5日)

囲いわなの構造

簡易囲いわなは約 20m 四方、地表面から高さ約 2m で構成し、1 辺は既存の仕切柵金網フェンスを利用し、3 辺の囲い部にはグリーンネットを用いた (図 II-6)。囲い部 1 辺のグリーンネットは、長さ 30m、幅 2m、網目約 3cm の既製品を用い。さらにシカのくぐり抜け防止策として、囲い部の外壁となる 2m ネットにスカート部として幅 1m のネットを継ぎ足し、幅約 3m のネットを作成し使用した。なお、この仕様のネットの作成は渡航前に行い、現場では運搬と設置作業のみ行えるよう段取りした。設置に当たっては、立木にロープで固定し囲い部を構築した (写真 II-3, 写真 II-4)。

シカの進入口には既存の一段式扉の片開きマンゲート (写真 II-5) をそのまま用い、マンゲートの扉部にロープと重りを繋ぐことで常時閉鎖される機構とした。わなの捕獲装置については、開放状態のマンゲート扉部にワイヤーを接続し、わな中央部まで引いたワイヤーの末端を立木に固定した。ワイヤーの末端にシカが接触すると扉部に接続されたワイヤーが外れ、扉部が自動で閉鎖される仕組み (けり糸方式) とした (写真 II-6)。また、シカの出現業況や囲いわな内での動きを把握するため自動撮影カメラ 3 台を設置した。なお、今回は、すでにシカの移動経路として通り抜けている既存仕切柵のマンゲートを利用したため、シカを誘引するための誘引餌は使用しなかった。

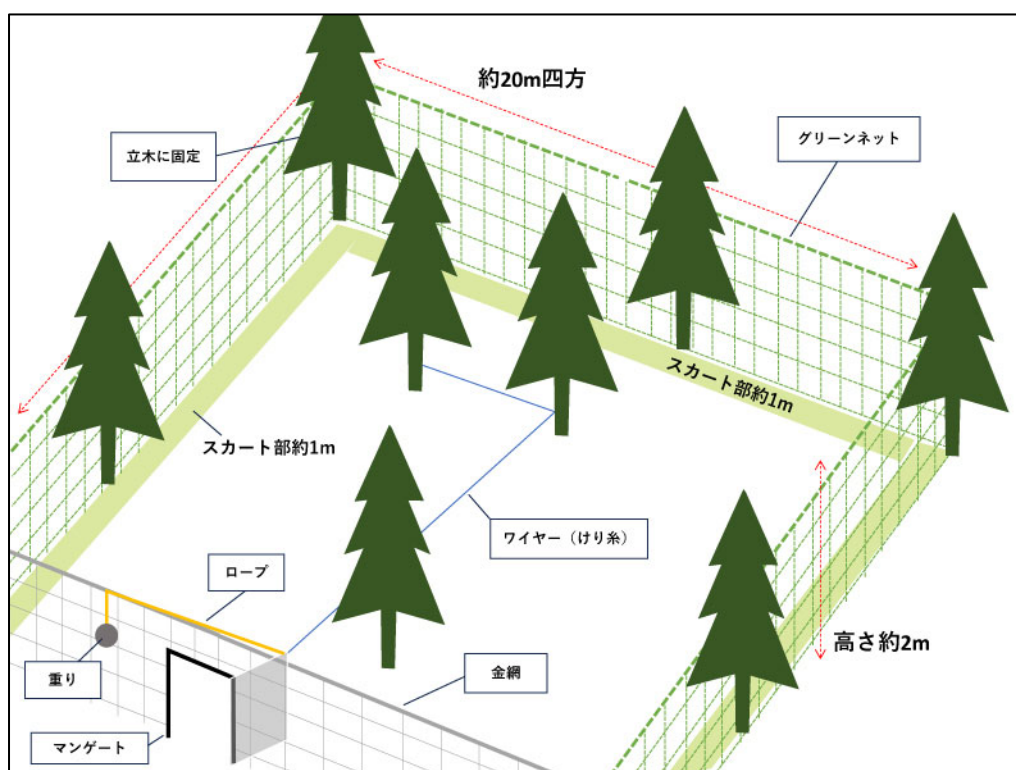
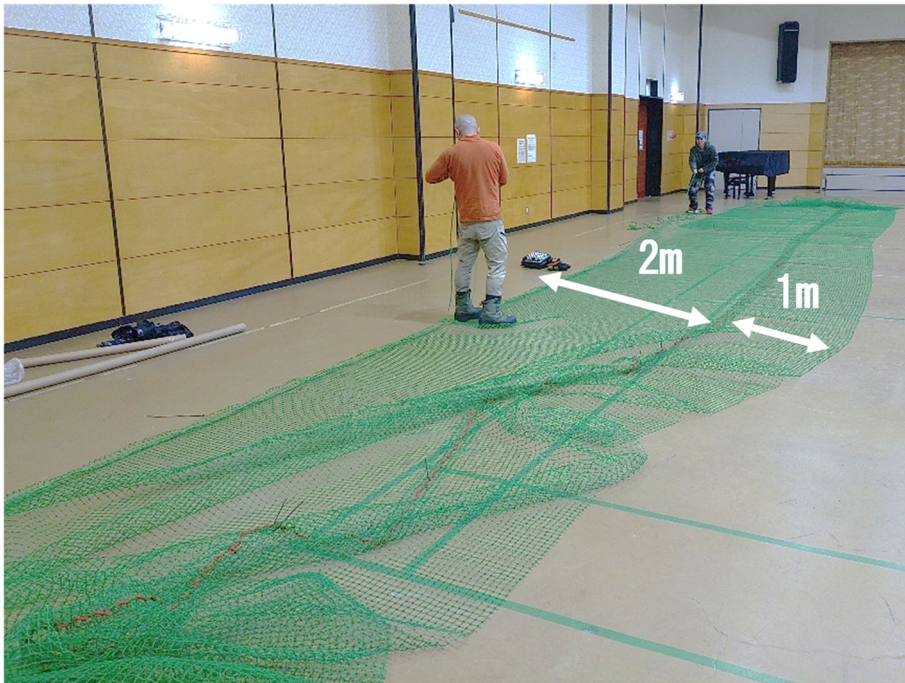


図 II-6. 簡易囲いわなの基本構造



写真Ⅱ-3. グリーンネットの事前準備の様子（2025年4月16日）



写真Ⅱ-4. 囲い部のグリーンネットの形状（2025年7月18日）



写真Ⅱ-5. シカの進入口及び閉鎖部となる片開きマンゲート（2025年6月25日）



写真Ⅱ-6. マンゲート扉部に接続したけり糸末端のトリガー（捕獲機構）（2025年6月25日）

(2) 実施結果

作業の実施状況

簡易囲いわなの運用に係る作業状況について表Ⅱ-11に整理した。4月から5月にかけて囲いわなの設置場所の下見及び選定作業等を行い、囲いわなの設置、稼働（捕獲待機）は6月より開始した。

表Ⅱ-11. 簡易囲いわなに關わる作業の実施状況

実施日	作業項目	備考
4月8日	設置候補地の検討・確認	
4月16日	グリーンネット準備・作成	ウトロ地区にて実施
4月18日	グリーンネット取り付け試験	〃
4月24日	設置位置の確定・位置だし等	
5月22日	マンゲート外側に自動撮影カメラ設置	
6月3日	グリーンネット等資材移送	
6月24日	囲い部・ゲートけり糸等設置 わな稼働、捕獲開始①	メスジカが囲い内に入りけり糸に触れるも扉が閉まらず。
6月25日	捕獲なし。一時閉鎖。	有識者伊吾田氏視察
7月8日	わな稼働、捕獲開始②	シカ出現なし
7月9日	捕獲なし。一時閉鎖。	
7月17日	わな稼働、捕獲開始③	有識者稲富氏視察
7月18日	捕獲なし。一時閉鎖。	囲い部にメスジカを閉じ込めるも早朝にネット下から逃走
8月5日	わな稼働、捕獲開始④	シカ出現なし
8月6日	捕獲なし。完全撤収。	

囲いわな資材の設置

簡易囲いわなを構築するにあたって、1辺は既存の仕切柵フェンス（金網）を活用し、その他3辺はグリーンネットを囲い部の壁面として設置した（写真Ⅱ-7）。設置作業は2～4名で行い、グリーンネットは立木にロープで固定し、囲い部の高さを2m程度確保した（写真Ⅱ-8、写真Ⅱ-9）。また、ネット下からのくぐり抜けを防止するため、囲い部の内側に1mのスカート部を作り、付近の枝や倒木等を重しとして載せる対策を施した。囲いわなの閉鎖扉には既存の一段式扉の鉄製マンゲートを使用した。



写真Ⅱ-7. 使用したグリーンネット（2025年4月18日）



写真Ⅱ-8. グリーンネットの運搬の様子（2025年6月3日）



写真Ⅱ-9. グリーンネットの設置作業の様子（2025年6月3日）

捕獲結果

簡易囲いわなの捕獲試行を目的として、6月24日、7月8日、7月17日、8月5日の計4回（4トラップナイト）稼働させた。その内、1回目の6月24日と3回目の7月17日の2回はシカの出現があり、どちらも囲い部内にシカが進入した。一方、2回目の7月8日と4回目の8月5日の2回はシカの出現がなく捕獲には至らなかった。シカが出現し囲い部内に進入した2回の経過は以下の通りである。

■簡易囲いわな捕獲 1 回目 (6 月 24 日～25 日)

【概要】

シカが 3 頭出現し、うち 2 頭が囲い部内へ進入した。しかし、けり糸を飛び越えたり、けり糸に触れはしたもののワイヤーの緊張が足りず、最終的には跨がれたため、捕獲には至らなかった (表 II-12)。

表 II-12. 簡易囲いわなでの 1 回目の捕獲の様子



日付	時間	内容
6 月 24 日	12:00	簡易囲いわな稼働。
	21:19	扉前にメスジカ 1 頭出現。→囲い部に入らず。 
	21:54 21:56	扉前にメスジカ 1 頭出現。 →囲い部に進入。 →けり糸を飛び越えたためわな作動せず。  →扉前にいた別の 1 頭が驚いて逃走。 →けり糸を飛び越えた個体は囲い部に残存。


日付	時間	内容
6月24日	22:03	扉前にメスジカ1頭出現。 → 罠い部に進入。罠い部内に計2頭が滞留。 
	22:14	→ 1頭がけり糸に触れるもまたいだためわな作動せず。 
	22:15	→ 扉前での最後の写り込み。この前後で2頭は罠い部外へ出た模様
6月25日	4:40	見回り① → わな非稼働を確認 → 捕獲継続
	7:30	見回り② → わな非稼働を確認 → 捕獲継続
	13:15	見回り③ → わな非稼働を確認 → 捕獲終了

■簡易囲いわな捕獲 3 回目 (7 月 19 日～20 日)

シカが 1 頭出現し囲い部内へ進入。けり糸に触れ扉閉鎖。その後 3 時間ほど囲い部に閉じ込めるも明け方にネット下をくぐり抜け逃走した (表 II-13)。

表 II-13. 簡易囲いわなでの 3 回目の捕獲の様子

日付	時間	内容
7 月 17 日	8:20	簡易囲いわな稼働。
	17:04	扉前をヒグマ(メス成獣サイズ)1 頭が通過。→囲い部に入らず。
7 月 18 日	00:01	扉前にメスジカ 1 頭出現。 →囲い部に進入。 
	00:14	→わな稼働。扉閉鎖。メスジカ 1 頭を囲いわな内に確保。 

日付	時間	内容
	3:27	 <p>Hyke M 2025/07/18 01:03:57 028°C</p> <p>→この時間を最後に写り込みなし。</p>  <p>Hyke M 2025/07/18 03:27:54 027°C</p>
	5:15 6:45	<p>見回り① →わな稼働、扉閉鎖を確認。 →猟銃による止め差し体制へ移行。 →囲い部外から観察するも内部にシカの姿なし。</p> <p>6:45 →シカの逃走を確認。下記ネット下部よりくぐり抜けた模様。</p> 
	7:00	→捕獲終了

(3) まとめ・考察

本業務において、非積雪期の知床岬地区にて簡易囲いわなの設置からシカの捕獲までの一連の作業を試行したことで、最終的なシカの捕獲までは至らなかったものの、新たな捕獲手法としての確立に向けて課題も含め有用な知見を得ることができた。課題としては、遺産地域内および国有林内という条件下において、例えば囲い部の設置にあたり樹木の損傷や土地の改変につながるような過度な施工が制約されるため、囲いとしての強度を一定以上には高められず、本業務の事例においてはシカがネットの下をくぐり抜けて逃走するなど不具合が生じる結果となったことなどが挙げられる。

これら不可避な制約については、コストの増加はあるものの、一例としてはネットを長くするなど現場の創意工夫で解決を図りつつ、今回は実施には至らなかった銃による止めさしの行程などについて、後述の有識者からの助言を取り入れ、安全かつ確実に実施できるような手法の確立に向けてさらなる向上が求められる。

簡易囲いわなは、アクセス手段や作業のリソース面での制約等により、展開可能な捕獲手法が限られている環境下において、低コストかつ効率的にシカの捕獲を行うための一助となり得る。今後も捕獲試行を継続し手法を確立することで、現在の知床半島におけるシカ管理の重点課題となっている知床岬地区におけるシカ捕獲の今後の展開を検討する上で大きな一助になるものと考えている。

2-2. 捕獲個体の扱いについて（今後に向けた提案）

捕獲個体の扱いについては、基本的に回収を前提としつつも、回収作業には捕獲以上の労力が掛かるため、多頭捕獲を行う際にはその前提が障壁となることも事実である。また、回収後に帰港したウトロ地区からさらに処理施設への運搬も必要であり最終的にはさらなる追加コストも発生する。また、現在は、船舶において捕獲個体を知床岬地区から運び出しているが、運搬可能な船舶の確保についても将来的には不確定要素が多く持続性が担保できない状況となっている。

本業務においては、捕獲した7頭全てを回収したが、これを可能としたのは、計画段階より捕獲効率と回収等に掛かるコストを勘案し、後者を優先し捕獲作業は遠方まで行くことは取りやめ、文吉湾周辺のみで行うこととした結果である（写真Ⅱ-10～写真Ⅱ-13）。

知床岬地区においては令和3年度に指定管理鳥獣捕獲等事業として捕獲したシカの残置試験を行っており、指定管理鳥獣捕獲等事業での捕獲事業の再実施も選択肢の一つであるが、当時の実施状況より残置したシカにヒグマが誘引されることは明白であるため、その対策も含めての提言である。第一に、利用者ならびに関係者に対し、従前と同様に捕獲作業実施周知とともに捕獲個体残置の旨の注意喚起を行うことは必須である。次に、捕獲従事者の安全面の観点からも残置場所は任意の箇所に限定するなど安全対策を期すことも重要である。具体的には、既存仕切柵外（南側）は捕獲を実施しないエリアと設定し、捕獲した個体は仕切柵外へ移動させ残置するという運用方法を行うことも可能である。この運用方法は、現在検討されている簡易囲いわなによる捕獲にも適合している。もともと簡易囲いわなは、捕獲個体の残置場所の境界となる既存仕切柵を利用することを前提としているため、付随的に捕獲地点と残置場所が近接することとなり、回収や搬出に掛かるコストの低減にもつながると想定される。さらに、簡易囲いわなは、移動することを前提に構築されているため、シカを捕獲し残置した簡易囲いわなは即時撤去し、別地点にて移動し再度捕獲を試みることも可能となる。

航空カウントやカメラ調査の結果、現在知床岬地区のシカは増加傾向にあることから、再びシカの低密度化を進める手法として、冬期捕獲の再開も検討項目となっている。この状況において求められる成果は多頭捕獲であり、繰り返しとなるが、回収を前提とした方針とは現実的に両立はできない構図となり、今後の展開を検討する上で、早急な判断が必要とされている。



写真Ⅱ-10. 捕獲個体の回収①



写真Ⅱ-11. 捕獲個体の回収②



写真Ⅱ-12. 捕獲個体の運搬（ウトロ港）



写真Ⅱ-13. 捕獲個体の搬入（廃棄施設）

3. より効果的かつ効率的な対策に向けた従来手法の改善見直し

3-1. シカデコイを用いた捕獲対策の検討

日本国内では、等身大のシカデコイに対する野生ニホンジカの行動反応に関する先行研究から、北海道日高管内の牧場内で行われたデコイによる誘引実験によりエゾシカの誘引効果が証明されている（2012.檀上ら）。また、囲いわなによるエゾシカ捕獲の手引きにおいても、囲いわな捕獲におけるデコイの活用指針が示されており、捕獲時の補助資材としての有用性について言及されている（2021.北海道立総合研究機構）。

本事業では、知床世界自然遺産地域内におけるシカの個体数調整事業によるシカ生息状況の低密度化に向けた捕獲対策手法の改善を目的に、自然環境下での誘引試験によるシカデコイ活用の効果検証を実施した。

（1）実施方法

試験場所

シカデコイを用いた誘引試験は、遺産地域の生態系維持回復を目的とした開拓跡地の森林再生事業「しれとこ 100 平方メートル運動（斜里町）」の作業地である岩尾別地区にて実施した（図Ⅱ-7）。



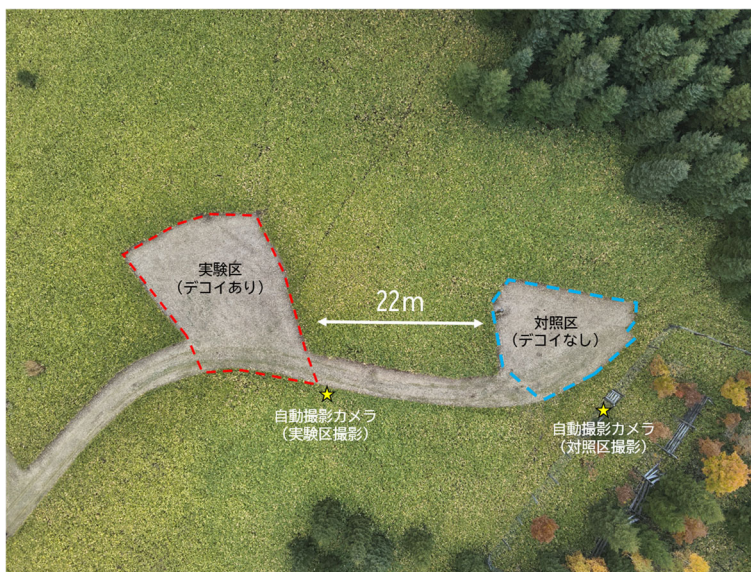
図Ⅱ-7. シカデコイを用いた誘引試験の実施場所（岩尾別地区）

試験方法

誘引試験の実施方法を表Ⅱ-13に示す。シカデコイを設置した実験区及び設置していない対照区に自動撮影カメラを1台ずつ設置し、静止画撮影によるシカの撮影回数及び撮影頭数のカウントのほか、静止画と同時に撮影される動画からシカの行動や態様の確認を行った(図Ⅱ-8,写真Ⅱ-14~18)。なお、いずれの区域もしれとこ100平方メートル運動地における森林再生事業において、作業道として利用するため刈払いが行われたササ地であり、クマイザサをはじめとした自然草本の若葉が点在している環境となっている。また、自然環境下におけるシカデコイの誘引効果を検証するため、本試験では誘引餌を使用しなかった。

表Ⅱ-13. デコイを用いた誘引試験の実施方法

	実験区	対象区
自然環境	ササ地(刈払い後)	
試験区面積	約80㎡	約50㎡
デコイ	2頭(体長104cm, 体高81cm)	なし
撮影方法	自動撮影カメラ(ハイクカム SP2)	
	撮影期間: 2025年9月12日~10月17日(36日間)	
	500万画素 / 動画(10秒) + 静止画(1枚) / 24時間稼働	
	タイムラプス(15分) + センサー(ディレイ60分)	



図Ⅱ-8. 誘引試験地の俯瞰図(10月17日)



写真Ⅱ-14. 実験区に設置した2頭のシカのデコイ



左：写真Ⅱ-15. 自動撮影カメラで撮影した実験区（デコイあり）

右：写真Ⅱ-16. 自動撮影カメラで撮影した対照区（デコイなし）



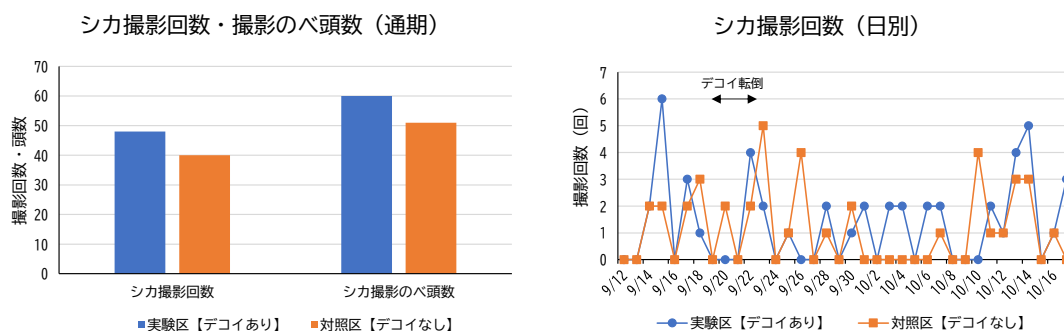
左：写真Ⅱ-17. 実験区で撮影されたシカの群れ（10月14日）

右：写真Ⅱ-18. 対照区で撮影されたオスのシカ（9月26日）

(2) 実施結果

9月12日から10月17日までの36日間にかけて、自動撮影カメラを設置し各試験区の撮影を行った結果、デコイを設置した実験区において3,511回の撮影があり、うちシカの撮影回数は48回、シカの撮影のべ頭数は60頭であった。デコイを設置していない対照区においては3,483回の撮影があり、うちシカの撮影回数は40回、シカの撮影のべ頭数は51頭であった(図II-9)。

各試験区の日別のシカ撮影回数を図II-10に示す。9月20日から9月23日までの4日間においては、実験区に設置した2頭のデコイが強風により倒伏したため、再発防止のため支柱を打ち込みこれにデコイを固定した(写真II-19)。また、濃霧によりシカの撮影状況を判別できない日や時間帯が度々生じ、天候条件が終日安定していた日数は36日間の試験期間のうち19日間であった(写真II-20)。



左：図II-9. 試験期間(通期)における試験区ごとのシカ撮影回数及び撮影のべ頭数

右：図II-10. 試験区ごとの日別のシカ撮影回数

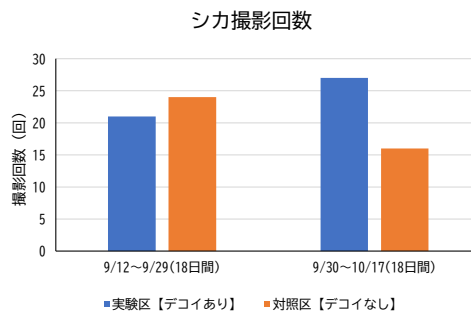
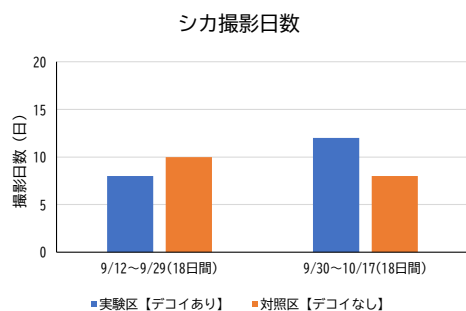


左：写真II-19. 強風により倒伏した実験区のデコイ(9月20日~9月23日)



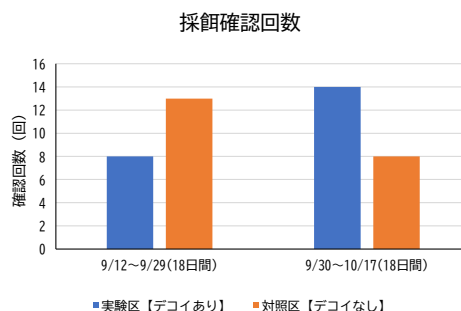
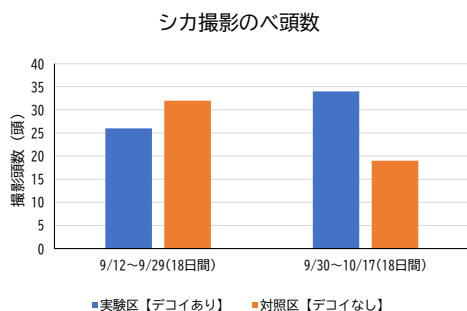
右：写真II-20. 濃霧によりシカの撮影有無の判別が不明瞭な撮影画像(9月28日)

時期ごとのシカの撮影状況を把握するため、36日間の試験期間を18日間ごとに前期と後期に区分し、各試験区におけるシカの撮影回数・撮影のべ頭数・撮影日数について図Ⅱ-11～14の通り集計した。いずれの集計値についても、前期は対照区の数値が高く、後期は実験区の数値が高い結果となった。試験区ごとの性齢別のシカ撮影割合を図Ⅱ-15に示す。実験区ではオス成獣の撮影頭数の割合が高く、0歳シカの割合が低い結果となった。



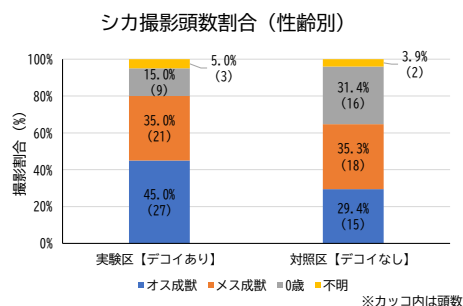
左：図Ⅱ-11. 試験区ごとの期間別シカ撮影日数

右：図Ⅱ-12. 試験区ごとの期間別シカ撮影回数



左：図Ⅱ-13. 試験区ごとの期間別シカ撮影のべ頭数

右：図Ⅱ-14. 試験区ごとの期間別シカ採餌確認回数



図Ⅱ-15. 試験区ごとの性齢別シカ撮影割合

(3) まとめ・考察

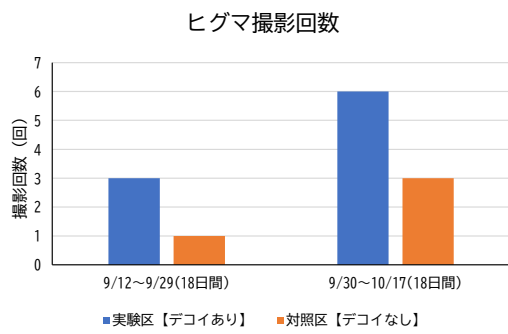
シカの誘引効果について

試験期間におけるシカ撮影回数及び撮影のべ頭数について、実験区の数値が対照区を僅かに上回ったことから、デコイを設置することでシカが実験区を忌避している可能性は極めて低いことが示唆された。また、36日間あった試験期間を18日間ごとに前期と後期に区分してこれらの数値を比較した結果、前期には実験区の数値が対象区を下回り、後期には上回った。この結果から、デコイを設置して間もない前期には一部のシカがデコイを警戒し実験区への往來を忌避していた可能性のほか、一部期間に倒伏していた状態のデコイに警戒した可能性が考えられる。また、後期には実験区のシカ撮影回数及び撮影のべ頭数、ならびに採餌確認回数が対照区を大きく上回ったため、試験日数を重ねることで、デコイへのシカの馴化が生じた可能性が示唆された。

ただし、シカの誘引におけるデコイの有効性を客観的かつ統計的に証明するにあたっては、本試験において取得した撮影データ数（サンプル数）が十分ではなかったことから、今後は試験期間をより長く設けるほか、誘引餌が有効な時期に試験を実施しシカの往來を促すなどして、少なくとも現状の2倍程度のサンプル数を確保する必要がある。また、日別のシカ撮影回数を試験区ごとに比較した場合、同日に両試験区でシカが撮影された日が一定数あったことから、いずれかの試験区で撮影されたシカがもう一方の試験区で撮影された可能性が考えられる。そのため、試験区間の距離をより長く設けるなどして、試験区間の空間的な重複関係を排除することも必要と考える。

ヒグマの誘引リスクについて

シカデコイによる誘引試験中、各試験区において自動撮影カメラでヒグマが複数回撮影された（図Ⅱ-16）。また、試験最終日の10月17日にはヒグマが執拗にデコイに接触し倒伏させる様子が確認された（写真Ⅱ-21）。ヒグマの活動時期及び活動域においては、ヒグマがデコイをシカと誤認し接近してくる可能性があるため、捕獲作業時にシカデコイを用いる際には十分なリスク対策を講ずる必要がある。



左：図Ⅱ-16. 試験区ごとの期間別ヒグマ撮影回数

左：写真Ⅱ-21. 執拗にデコイに接触するヒグマの様子（10月17日）

4. 有識者からの現地指導

知床岬地区における捕獲手法の検討にあたり、環境省担当官と協議の上、3名の有識者より現地指導を受けた。各詳細は以下の通りである。

現地指導①

【有識者】

国立研究開発法人 森林総合研究所 森林研究部門野生動物研究領域 鳥獣生態研究室 主任研究員	飯島勇人 氏
--	--------

【現地指導の概要】

実施日：2025年5月8日（木）～9日（金）

*当初は4/16～17の日程で現地指導を予定していたが、天候不順のため延期となった。

実施地：知床岬

有識者：飯島勇人 氏

対応者：松林良太（公益財団法人知床財団）他、作業従事者

【指導内容】

(1) エゾシカ生息密度の推定について

- ・ 生息密度推定用カメラ（ISC）を用いたシカの密度推定について、本来ある特定の時期の推定を行うための調査手法であり、本調査のような通年の調査は想定されていない。そのため、今回初めて通年調査を実施し判明した課題を個々にクリアしていく必要がある。
 - グリーンシーズンにおいて、草本が繁茂し動物が視認できないという課題に関しては、今年度の調査より該当箇所のカメラ位置を高くするなど対策を施した。よって、以降は良い結果が得られると考えている。
 - 当初は5分間隔で撮影したデータをもとにIS手法により解析処理を行っていたが、解析コストやデータ量が膨大になることと合わせ、自動撮影カメラの電池消耗の関係からも15分間隔で撮影した場合と比較を行った。結果、大きな差は確認されなかったため、今年度よりISCカメラは全て15分間隔で撮影するように設定を変更した。
 - 確実なデータ収集のための改良として、当初は撮影面積（画像内でシカをカウントする範囲）を四辺計測（台形）で設定していたが、今年度より三辺計測（三角形）に変更した。これによって、現地で撮影面積を再現する必要がある場合など時間を短縮することが見込まれる。

- ・ 同調査期間中に捕獲作業を行うと調査結果に影響が出ると思われる。そのため、捕獲の際は、射手の移動情報や捕獲個体の位置情報を取得しておくことで、捕獲が集中しているエリアではシカの撮影頭数が減少する等の傾向を見ることができないのではないかと考えている。

(2) エゾシカの動態について

- ・ 個体群動態把握用カメラ (MNC) を用いた同調査は、今後も継続してデータを蓄積し、通年での個体群動態の変化を把握することが重要である。
- ・ ただし、遠隔地に設置した MNC8~10 については、作業的にメンテナンス等が困難なとのこと、少なくとも 1 年間のデータは蓄積したため、撤去は致し方なしと考える。

(3) その他

- ・ シカの捕獲から回収、搬出、廃棄までの一連の流れを体験し、多大な労力がかかることを改めて認識した。



写真Ⅱ-22. ISC カメラの撮影面積の再設定を行う飯島氏 (2025 年 5 月 8 日)

現地指導②

【有識者】

酪農学園大学農食環境学群環境共生学類 准教授

伊吾田宏正 氏

【現地指導の概要】

実施日：2025年6月25日（水）

実施地：知床岬

有識者：伊吾田宏正 氏

対応者：松林良太（公益財団法人知床財団）他、作業従事者

同行者：松浦友紀子 氏（一般社団法人エゾシカ協会 理事）

渡邊拓真 氏（一般社団法人エゾシカ協会）

田中純平 氏（一般社団法人エゾシカ協会）

【指導内容】

(1) 銃猟捕獲について

- ・ ここ数年、実際にグリーンシーズンの知床岬地区に視察に来ているが、やはり草本が繁茂する6月以降は、見通しも悪く捕獲効率やヒグマとの遭遇リスクの観点から銃猟捕獲には不適な季節である。
- ・ 以前からも指摘しているが、持続的に捕獲事業を継続していくためには、宿泊場所等を含め複数の拠点機能の充実化が不可欠である。
- ・ 知床岬地区での捕獲全般について、再び高密度化しつつある現状において、冬期の捕獲は個体数を減らすという面で重要であるが、非積雪期についても攪乱効果も含め植生保護の観点から捕獲を実施する意義はあるという視点で組み立てる必要がある。

(2) 簡易囲いわなについて

- ・ 今回は捕獲には至らなかったが、簡易囲いわなは非常に簡易に場所を移せるので、将来的にシカが低密度になった以降の捕獲手法としても有効に機能するのではないかとという印象を持った。
- ・ 囲い部に閉じ込めた際、ネットの継ぎ目などが弱い箇所を狙われる恐れがある。また、止めさしの際にシカが暴れ飛び越えられる恐れもある。今後の検証課題として、囲い部に閉じ込めた際のシカの行動を把握する必要がある。シカの見通しが効くという意味では網目は大きい方が良い可能性もある。
- ・ 参考として洞爺湖中島でのシカ捕獲事業の例では、周囲長が150mの柵にシカを閉じ込めた際は特に暴れることはなかった。一点、銃による止めさしの際は林業用の三脚を使用した安定性に課題があった。よって、止めさしについては、予め場所を適所に定

めハイチェア一等の安定したポイントを用意しておくことが重要である。

- ・ 夏と冬など季節にもよるが、囲い部内の誘引餌の有無でもシカの落ち着き具合が異なってくると思われる。
- ・ マンゲート扉を閉じる機構はとても単純なもので工夫がされていた。改良点として以下3点があげられる。
 - 知床岬地区という携帯電話の圏外という事情でメール送信式の自動撮影カメラなども使えないため、現時点では遠方からの目視で扉の開閉状況を確認していたが、捕獲後に極力シカに人の気配を感じさせないように、目視以外で開閉状況を知る仕組みがあった方がよい。解決方法として、すでに各地のわな捕獲等で用いられている携帯電波に寄らない開閉を知らせる無線機器があるため追って紹介する。
 - 現状では扉には特にロック機構はなく、単純にシカは扉を引いて開けることはできないという前提で運用しているが、万が一に備えてロックする仕組みも考えた方がよい。
 - 現場でも検討しているとのことだが、ヒグマが囲い部内に入り扉が閉まることは高い可能性で考えられるため、錯誤捕獲の際に扉かネットのどこかを開放し、安全にヒグマを逃がせる仕組みが必要である。



写真Ⅱ-23. 簡易囲いわなのマンゲート機構部を確認する伊吾田氏（2025年6月25日）

現地指導③

【有識者】

地方独立行政法人 北海道道立総合研究機構 産業技術環境研究本部 エネルギー・環境・地質研究所 自然環境部 生物多様性保全グループ 研究主幹 兼 道東地区野生生物室長	稲富佳洋 氏
--	--------

【現地指導の概要】

実施日：2025年7月17日（木）～18日（金）

実施地：知床岬

有識者：稲富佳洋 氏

対応者：松林良太（公益財団法人知床財団）他、作業従事者

【指導内容】

(1) 簡易囲いわなの特性等について

- ・ グリーンシーズンのシカの動向を鑑みると、簡易囲いわなの運用メリットとして、従来の捕獲手法では実施されてこなかった夜間の捕獲が可能という点が挙げられる。また、囲いわな捕獲は従来の銃猟捕獲に比べ作業員の労力的な負担が少ないという点も、持続的な捕獲を実現する上で重要な視点である。
- ・ 今年度の簡易囲いわな運用時期の6,7月は、過去の個体数調整事業の結果や現地作業員の感覚からシカが低密度に近い状態といえるだろう。今回の捕獲結果を含め、これまで簡易囲いわな内部に二度シカが入ったことは、低密度状態における捕獲手法として一定程度有効であると評価できるのではないか。
- ・ 一方で、グリーンシーズンにおける植生保全を目的としたシカの忌避・攪乱効果という観点からは、囲いわなは銃猟に比べ効果が低いと考えられる。

(2) 簡易囲いわなの構造について

- ・ 今回の試行捕獲で捕獲個体が脱出したと思われる箇所の様子から、シカの脱出を防止するために設置されているスカート部が短かったためにネットを潜られた可能性が考えられるため、あと1mほどスカートを長くすると脱出防止に効果的と思う。また、スカート部に杭を打ち地面と固定する、より重量のある倒木をスカート部に置くなどすることも効果的ではないか。
- ・ シカがネットを飛び越える恐れのある箇所がいくつか見受けられたため、壁面ネット四辺の上部へロープを追加的に設置することで、飛び越えられるリスクを低減することができるのではないか。また、わな内部のネット付近に切株や倒木などがあると、シカがネットを飛び越える際の踏み台にされてしまうため、切株や倒木などの内側に壁

面ネットを設置するなどの工夫があると良い。

- ・ 囲いわなで捕獲したシカは、わなに進入した箇所を中心に脱出を試みようとする傾向があり、今回の捕獲個体も進入したマンゲート付近に滞留する傾向が見られた。わな壁面で最も強度の高い仕切柵とマンゲートの構造特性が捕獲個体の脱出防止に一定程度寄与していると考えられる。

(3) 簡易囲いわなの運用について

- ・ 捕獲の有無をわなに接近して目視確認しているが、目視確認時に捕獲個体を暴れさせてしまうリスクがあるため、遠隔で確認可能な捕獲検知システムを導入した方が良い。
- ・ 捕獲後の止めさしのオペレーションについて、バックストップや射手の視界確保の観点から、囲いわなの上辺付近（海側林内）に止めさし位置を設定することが望ましい。また、止めさしを行う際には簡易ハイシートを用いるなどして、なるべく高い位置から発砲するのが有効と思う。

(4) リスク対策について

- ・ 簡易囲いわなの設置や捕獲作業時におけるヒグマとの遭遇や錯誤捕獲・熱中症等のリスクを考慮した場合、囲いわなの運用時期の見極めが重要と考える。これらのリスク対策に加え、シカの動向や生息状況も加味すると、囲いわなの運用時期は5月頃が適当と思う。
- ・ ヒグマを錯誤捕獲してしまう可能性があるため、錯誤捕獲時に作業員が安全にヒグマを囲いわな外部へ放獣できる仕組みが必須である。具体的には、進入口となるマンゲートにロープを設置し、囲いわなから離れた場所からロープを引いてマンゲートを開放する方法などが考えられる。
- ・ 作業時のヒグマ対策として、仕切柵内で作業員と遭遇したヒグマが仕切柵外へ容易に逃走できるよう、簡易囲いわな周辺の仕切柵マンゲートは開放しておいた方が良い。

(5) 記録・収集すべき項目について

- ・ 囲い壁面の四辺それぞれに自動撮影カメラを設置するなどして、捕獲時にわな内部で捕獲個体がどのように脱出を試みるかを記録することで、シカに狙われやすい箇所やより強固に補強しなければいけない箇所の特定に資するデータ収集に繋がるのではないかと。
- ・ 適切な稼働日数や稼働間隔を検討するにあたり、捕獲によってわなが閉鎖している状況でわな外部の他個体の動態や警戒の有無なども記録しておくが良い。



写真Ⅱ-24. 簡易囲いわなの囲い部を確認する稲富氏（2025年7月18日）

III. 2026（R8）シカ年度遺産地域における実行計画案の作成

本業務の検討結果を踏まえ、翌シカ年度に遺産地域内において実行可能な個体数調整のための各種取組について、実行計画案を作成した。ただし、翌シカ年度における航空カウント調査（2026年2～3月）はまだ実施されていないため、捕獲目標頭数については前年の航空カウント調査結果（2025年2～3月）を元に設定した。

表 1. 遺産地域における捕獲・対策取組一覧

事業主体	地区 [事業No.]	実施時期	捕獲手法	実施場所	実施回数 わな基数	捕獲目標 頭数
環境省	知床岬 [特4] (位置図1)	2026年 4月～5月上旬 ^{※1} 4月～10月 ^{※1}	待伏せ式狙撃 簡易囲いわな 試行 自動撮影カメラによるモニタリング調査	知床岬先端部	延べ4日以上	メス成獣 101頭
		2027年 2月～3月 4月～5月上旬 4月以降も継続	厳冬期における巻き狩り 待伏せ式狙撃 簡易囲いわな 試行 自動撮影カメラによるモニタリング調査		延べ4日以上 (準備含む) 延べ4日以上	メス成獣 101頭 ^{※2}
	ルサ-相泊 [B2] (位置図2)	12月～3月	くくりわな猟 ほか	アイドマリ川、 ルサ川流域、 昆布浜周辺ほか	10回以上 30基以上	38頭 ^{※2}
	幌別-岩尾 別[B6] (位置図3)	12月～3月	大型仕切柵による囲いわな式捕獲ほか	岩尾別台地上	3回以上	28頭 ^{※2}
			待ち伏せ式狙撃、忍び猟ほか	岩尾別川河口付近ほか	8回以上	
			くくりわな猟ほか	幌別	10回以上 15基以上	

※1. 4月から5月は2025（R7）シカ年度事業に該当

※2. 捕獲目標頭数は今後の航空カウント調査結果を踏まえて算出。また、実施時期や実施手法、実施回数については、エゾシカWG委員の意見のほか、航空カウント調査結果等も踏まえて適宜見直し。

2026(R8)シカ年度 知床半島エゾシカ捕獲事業計画（遺産地域）

1. 目的

エゾシカの個体数調整を実施することにより、知床国立公園及び知床世界自然遺産地域（以下「遺産地域」という。）におけるエゾシカの過増加による生態系への深刻な悪影響の緩和を図る。

2. 実施地区及び実施期間

計画期間：令和 8（2026）年 6 月～令和 9（2027）年 5 月（※6～8 月）

実施地区ごとの期間は下表のとおり。

実施地区	実施期間
知床岬地区	①令和 8（2026）年 4 月～10 月※ ¹ ②令和 9（2027）年 2～3 月 ③令和 9（2027）年 4～5 月
ルサ-相泊地区（羅臼町）	令和 8 年 12 月～令和 9 年 3 月
幌別-岩尾別地区（斜里町）	令和 8 年 12 月～令和 9 年 3 月

※1. 4～5 月は前シカ（2025）年度事業として実施

※2. シカ年度は 6 月から翌年 5 月までの期間をいう。以下、文中「年度」の表記についてはシカ年度を指す。

3. 捕獲目標及びエゾシカ生息確認状況

実施地区ごとの捕獲目標頭数は下表のとおり。

実施地区	捕獲目標頭数 ※1
知床岬地区	メス成獣 101 頭以上 ※1
ルサ-相泊地区	38 頭以上 ※2 (内メス成獣 11 頭以上)
幌別-岩尾別地区	28 頭以上 ※2 (内メス成獣 8 頭以上)

※1. 知床岬地区は、2025 年の航空カウント調査結果における発見頭数のうち、メス成獣の半数以上を捕獲目標頭数として設定した。

※2. 知床岬地区以外の 2 地区は、2025 年の航空カウント調査結果における発見頭数（雌雄合計）から一般的な自然増加率（年当たり 21%）分を算出し、雌雄合計として捕獲目標頭数を設定。この内メス成獣については、過去の捕獲実績より上記目標頭数の約 3 割程度を目標頭数として設定。

IV. 知床世界自然遺産地域科学委員会エゾシカ WG における資料の作成等

2025年6月27日に開催された令和7年度第1回知床世界自然遺産地域科学委員会エゾシカ WG において使用する前項実行計画案に係る資料を作成し、会議の場で必要に応じて説明と質疑への対応を行った。また、6月13日に実施した事前の座長等への説明(Web 会議形式)に出席し、資料内容の説明と質疑への対応も行った。なお、実行計画案(巻末資料2参照)以外に作成した資料については、知床データセンターの会議資料のページに掲載されている(下記 URL 参照)。

※知床データセンター 令和7年度第1回エゾシカ WG 議事次第

(https://shiretokodata-center.env.go.jp/meeting/ezoshika_wg/r07_01.html)

V. 参考・引用文献

公益財団法人知床財団 2025a. 環境省請負事業 令和 6 年度知床国立公園（積雪期）エゾシカ個体数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 46pp.

公益財団法人知床財団 2025b. 環境省請負事業 令和 5 年度（繰越）知床生態系維持回復事業エゾシカ航空カウント調査業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 13 pp.

公益財団法人知床財団 2024a. 環境省請負事業 令和 6 年度知床国立公園エゾシカ対策検討業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 77 pp.

公益財団法人知床財団 2024b. 環境省請負事業 令和 5 年度知床生態系維持回復事業エゾシカ航空カウント調査業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 13 pp.

公益財団法人知床財団 2023a. 環境省請負事業 令和 5 年度知床国立公園（非積雪期）エゾシカ個体数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 32 pp.

公益財団法人知床財団 2023b. 環境省請負事業 令和 4 年度知床生態系維持回復事業エゾシカ航空カウント調査業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 36 pp.

公益財団法人知床財団 2023c. 環境省請負事業 令和 4 年度知床国立公園エゾシカ対策（日没時銃猟）評価検証等業務報告書. 公益財団法人 知床財団.

公益財団法人知床財団 2022a. 環境省請負事業 令和 3 年度知床国立公園エゾシカ個体数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 127 pp.

公益財団法人知床財団 2022b. 環境省請負事業 令和元年度知床生態系維持回復事業エゾシカ航空カウント調査業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 49pp.

公益財団法人知床財団 2021a. 環境省請負事業 令和 2 年度知床国立公園エゾシカ個体数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 120 pp.

公益財団法人知床財団 2021b. 環境省請負事業 令和 2 年度知床生態系維持回復事業エゾシカ航空カウント調査業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 47pp.

公益財団法人知床財団 2021c. 環境省請負事業 令和 2 年度知床生態系維持回復事業
エゾシカ航空カウント調査業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 17pp.

公益財団法人知床財団 2020a. 環境省請負事業 令和 2 年度知床国立公園（春期）エゾシカ
個体数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 43 pp.

公益財団法人知床財団 2020b. 環境省請負事業 令和元年度知床国立公園エゾシカ個体
数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 85 pp.

公益財団法人知床財団 2020c. 環境省請負事業 令和元年度知床生態系維持回復事業
エゾシカ航空カウント調査業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 37pp.

公益財団法人知床財団 2019a. 環境省請負事業 平成 31 年度知床国立公園（春期）エゾ
シカ個体数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 50pp.

公益財団法人知床財団 2019b. 環境省請負事業 平成 30 年度知床国立公園エゾシカ個体
数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 103 pp.

公益財団法人知床財団 2019c. 環境省請負事業 平成 30 年度知床生態系維持回復事業
エゾシカ航空カウント調査業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 36pp.

公益財団法人知床財団 2018. 環境省請負事業 平成 30 年度知床国立公園（春期）エゾシカ
個体数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 101 pp.

公益財団法人知床財団 2018c. 環境省請負事業 平成 29 年度知床生態系維持回復事業
エゾシカ航空カウント調査業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 35pp.

公益財団法人知床財団 2017a. 環境省請負事業 平成 29 年度知床国立公園（春期）エゾ
シカ個体数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 67pp.

公益財団法人知床財団 2017b. 環境省請負事業 平成 28 年度知床生態系維持回復事業
エゾシカ航空カウント調査業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 42pp.

公益財団法人知床財団 2016a. 環境省請負事業 平成 28 年度知床国立公園（春期）エゾシ
カ個体数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 66 pp.

公益財団法人知床財団 2016b. 環境省請負事業 平成 27 年度知床国立公園エゾシカ個体数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 93pp.

公益財団法人知床財団 2015a. 環境省請負事業 平成 27 年度知床国立公園（春期）エゾシカ個体数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 83pp

公益財団法人知床財団 2015b. 環境省請負事業 平成 26 年度知床国立公園エゾシカ個体数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 110pp.

公益財団法人知床財団 2014a. 環境省請負事業 平成 26 年度知床国立公園（春期）エゾシカ個体数調整実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 46pp.

公益財団法人知床財団 2014b. 環境省請負事業 平成 25 年度知床国立公園エゾシカ密度雨操作実験実施業務報告書. 公益財団法人 知床財団. 91pp.

公益財団法人知床財団 2013. 環境省請負事業 平成 24 年度（秋期）知床国立公園エゾシカ捕獲手法検討業務 報告書. 公益財団法人 知床財団. 18pp.

Anna K. Moeller 2017. New Methods to Estimate Abundance from Unmarked Populations Using Remote Camera Trap Data.

Kohta Hayashi, Hayato Iijima 2022. Density estimation of non-independent unmarked animals from camera traps.

Anna K.Moeller, Paul M.Lukacs, Jon S.Horne 2018. Three novel methods to estimate abundance of unmarked animals using remote cameras.

Yoshihiro Nakashima, Keita Fukasawa, Hiromitsu Samejima. 2017. Estimating animal density without individual recognition using information derivable exclusively from camera traps.

地方独立行政法人北海道立総合研究機構,学校法人酪農学園,北海道 2021. 囲いわなによる エゾシカ捕獲の手引き～草地適用型囲いわなの紹介～.

檀上理沙,伊原和彦,亀井利活,竹田謙一 2012. 等身大シカデコイに対する野生ニホンジカの行動反応.信州大学農学部アルプス圏フィールド科学教育研究センター報 10;9-15

VI. 参考資料

参考資料 1. モニタリングユニット区分図

参考資料 2. 2025 (R7) シカ年度 知床半島エゾシカ捕獲事業計画

モニタリングユニット区分図

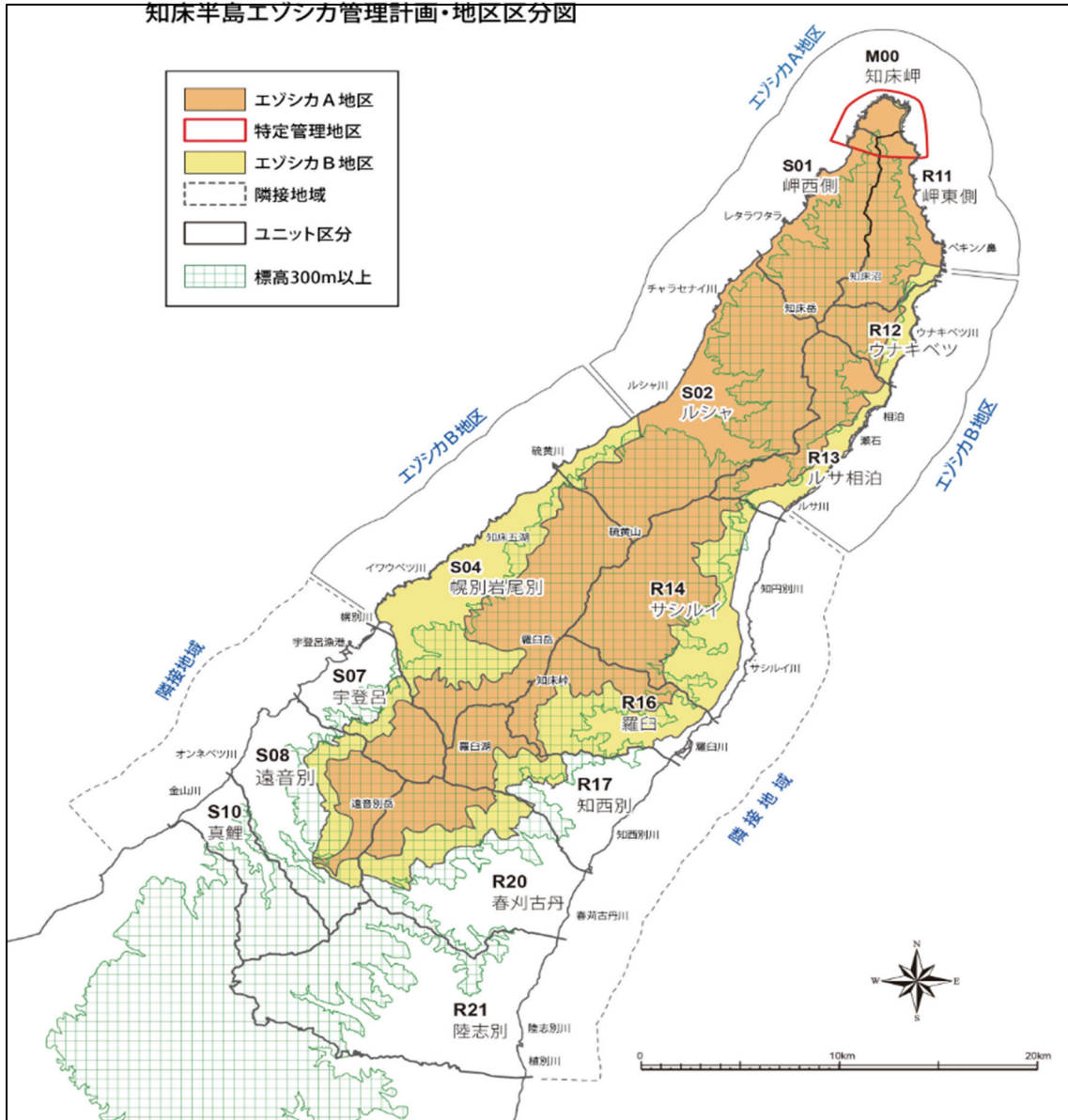


図 S-1. 知床半島におけるエゾシカの個体群管理および植生モニタリングに対応したモニタリングユニットの区分図 (M00, S04, R13 などがモニタリングユニット名)

2025(R7)シカ年度 知床半島エゾシカ捕獲事業計画

捕獲取組一覧

事業 主体	地 区 [事業No.]	実施時期	捕獲手法	実施場所	実施回数 わな基数	捕獲目標 頭数
【遺産地域】						
環境省	知床岬 [特4] (位置図1)	2026年4月～5月 ※1	次シカ年度計画により 実施内容を選択判断	知床岬先端部	延べ4日 以上 ※1	メス成獣 101頭 ※1
	ルサ-相泊 [B2] (位置図2)	12月～3月	くくりわな猟 ほか	アイドマリ川、ルサ川流域、昆布浜周辺ほか (図中①)	15回以上 30基以上	38頭
	幌別-岩尾別 [B6] (位置図3)	12月～3月	大型仕切柵による 囲いわな式捕獲	岩尾別台地上 (図中①)	3回以上	28頭
		12月～3月 ※2	待ち伏せ式狙撃 忍び猟 ほか	岩尾別川河口付近ほか (図中②)	8回以上	
		12月～3月	くくりわな猟 ほか	幌別川から岩尾別川間	10回以上 20基以上	
【隣接地域】						
林野庁	春苧古丹 [C4]	12月中旬～1月下旬 誘引は12月上旬開始	くくりわな猟	春苧古丹川周辺	20頭	20頭
	ウトロ～真鯉 [C9]	1月上旬～2月上旬	くくりわな猟	遠音別地区 (オシンコシン周辺)	60頭	60頭

※1 捕獲目標頭数、実施時期ならびに実施回数については、本WG委員の意見のほか、航空カウント調査結果等も踏まえて適宜見直し。

※2 12月は主に給餌による誘引、1月から捕獲を開始予定。

2025(R7)シカ年度 知床半島エゾシカ捕獲事業計画（案）（遺産地域）

1. 目的

エゾシカの個体数調整を実施することにより、知床国立公園及び知床世界自然遺産地域（以下、遺産地域という。）におけるエゾシカの過増加による生態系への深刻な悪影響の緩和を図る。

2. 実施地区及び実施期間

計画期間：令和7（2025）年6月～令和8（2026）年5月（※6～8月）

実施地区ごとの期間は下表のとおり。

実施地区	実施期間
知床岬地区	令和8年4月～5月（※6～10月）
ルサ-相泊地区（羅臼町）	令和7年12月～令和8年3月
幌別-岩尾別地区（斜里町）	令和7年12月～令和8年3月

※6月以降に捕獲する個体については、翌シカ年度の実施状況として整理を行う。

※シカ年度は6月から翌年5月までの期間をいう。以下、文中「年度」の表記についてはシカ年度を指す。

3. 捕獲目標及びエゾシカ生息確認状況

実施地区ごとの捕獲目標頭数は下表のとおり。

実施地区	捕獲目標頭数※1
知床岬地区	メス成獣 101 頭以上 ※1
ルサ-相泊地区	38 頭以上 ※2 (内メス成獣 11 頭以上)
幌別-岩尾別地区	28 頭以上 ※2 (内メス成獣 8 頭以上)

※1 知床岬地区は、直近の航空カウント調査結果における発見頭数のうち、メス成獣の半数以上を捕獲目標頭数として設定。

※2 知床岬地区以外の2地区は、直近の航空カウント調査結果における発見頭数（雌雄合計）から一般的な自然増加率（年当たり21%）分を算出し、雌雄合計として捕獲目標頭数を設定。この内メス成獣については、過去の捕獲実績より上記目標頭数の約3割程度を目標頭数として設定。

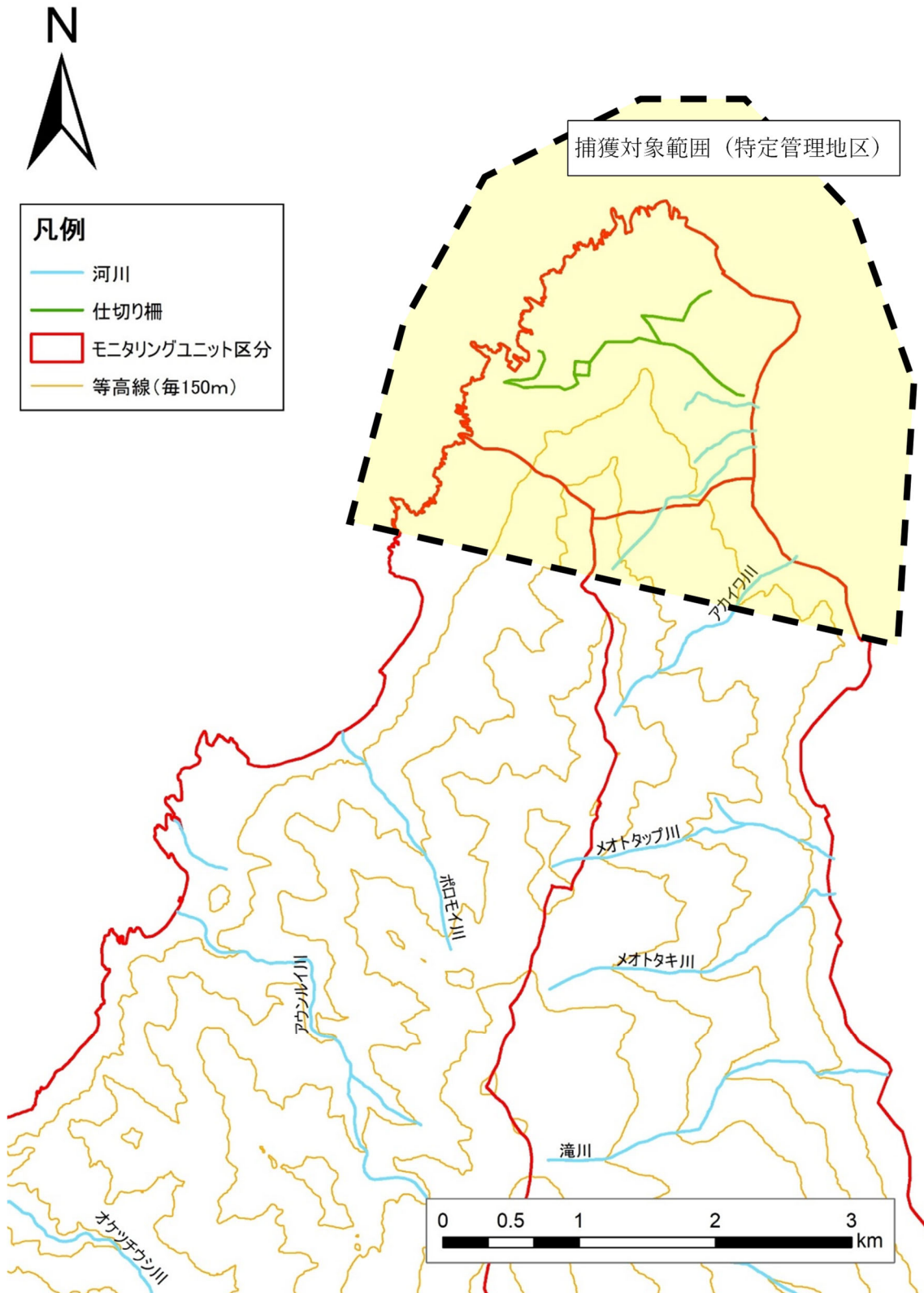
なお、実施地区ごとの目標密度等の状況は下表のとおり。

実施地区	第4期 目標密度	発見頭数※1	発見密度※1	
		2024年度	2024年度	第3期最終年 (2021年度)
知床岬地区	10 頭/km ²	426 頭※2 内メス成獣 203 頭	145.51 頭/km ²	78.64 頭/km ²
ルサ-相泊地区	5 頭/km ²	183 頭	7.41 頭/km ²	3.97 頭/km ²
幌別-岩尾別地区	5 頭/km ²	134 頭	4.61 頭/km ²	10.28 頭/km ²

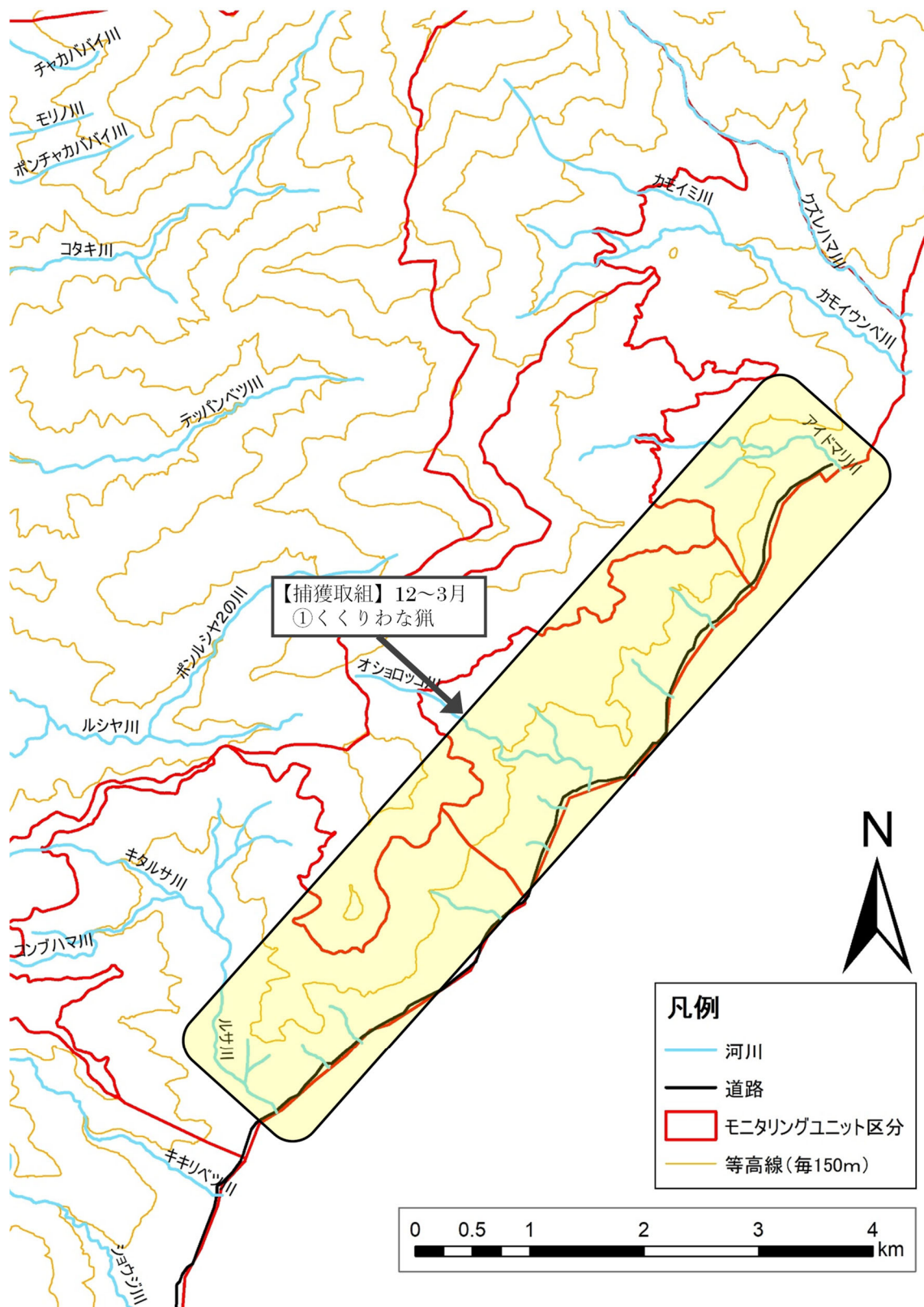
※1 発見頭数及び密度については、過年度のエゾシカ航空カウント結果を基に算出・掲載。

※2 知床岬地区の発見頭数は別途実施した詳細（旋回撮影）調査結果を掲載。

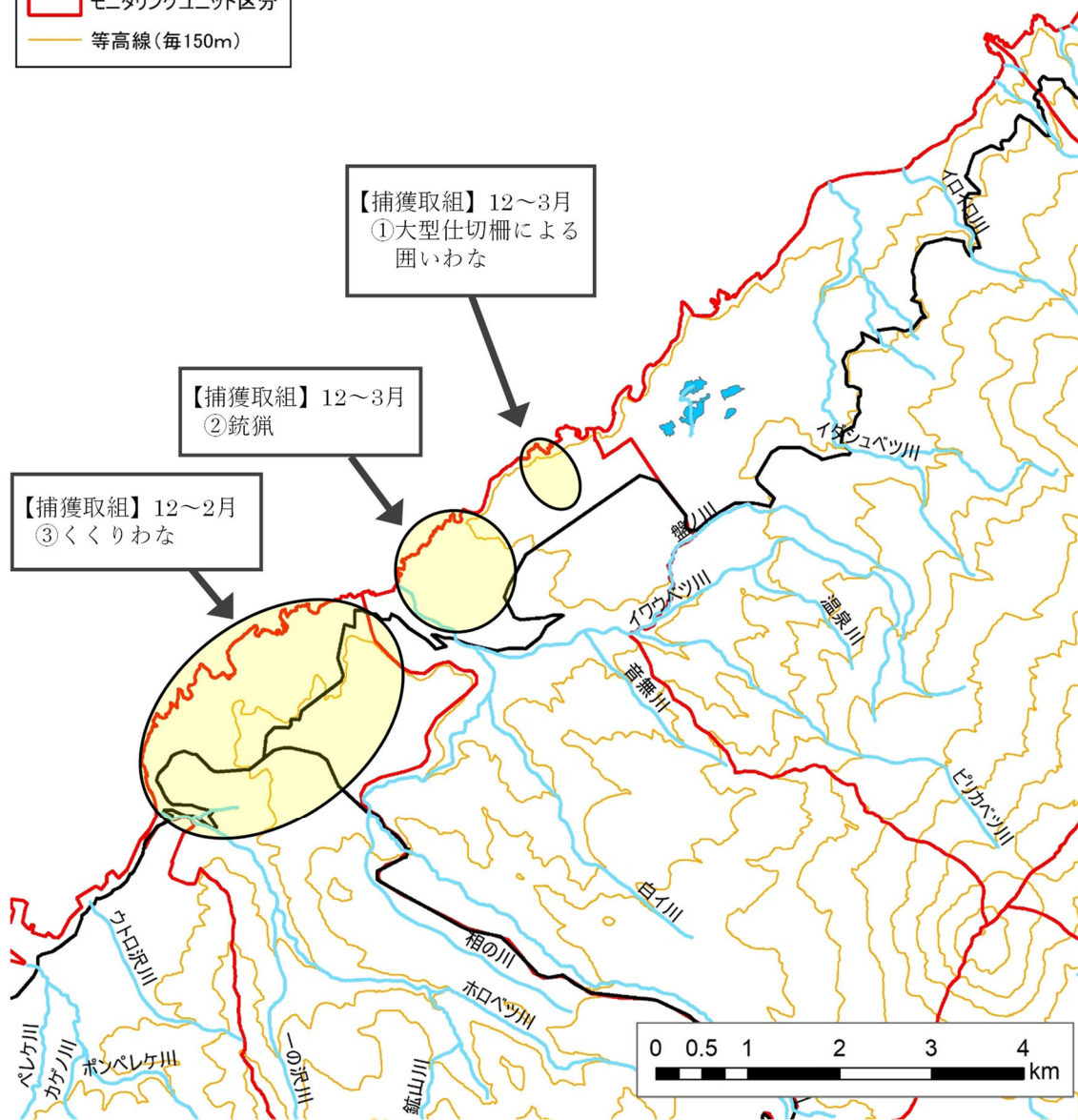
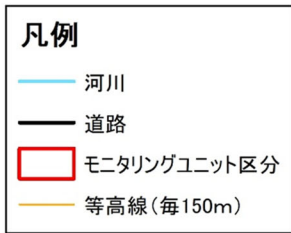
4. 捕獲等取組予定位置図



位置図(1) 知床岬地区



位置図(2) ルサ-相泊地区



位置図(3) 幌別-岩尾別台地

環境省 釧路自然環境事務所 請負事業

事業名：令和6年度（繰越）知床国立公園（非積雪期）エゾシカ個体数調整実施業務

事業期間：令和7年（2025年）4月1日～令和7年（2025年）11月10日

事業実施者：公益財団法人 知床財団

〒099-4356 北海道斜里郡斜里町大字遠音別村字岩宇別 531

知床自然センター内



リサイクル適性の表示：印刷用の紙へリサイクル可

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料 [A ランク] のみを用いて作成しています。